

# 書評

No. 56  
1981.6

---

近代的知に呪われた学問／渡辺幸博

---

現代資本主義分析の課題／森岡孝二

---

ピアジェ 晩年の思想／中城 進

---

連載 ■ 日本中国 ことばの来往／芝田 稔 他

---



書評編集委員会

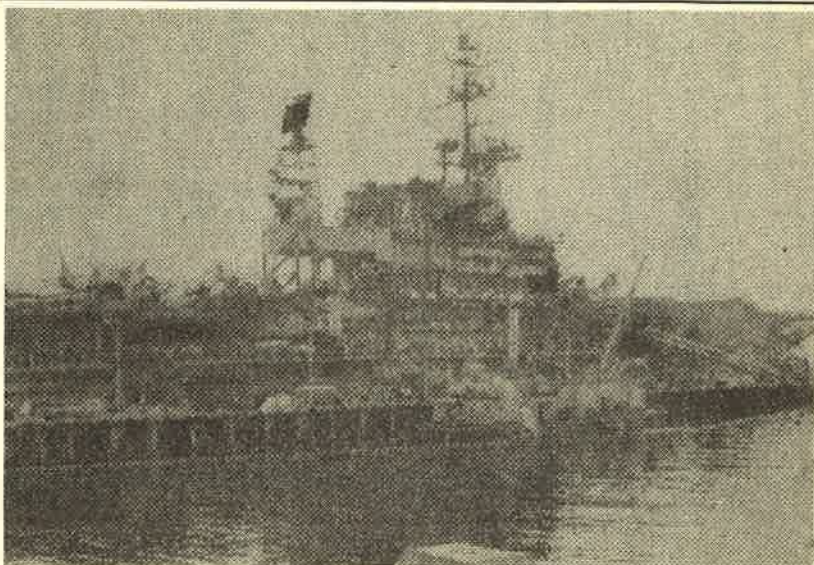
## 書評／56号 1981/6

羅 針 盤		1
書評 「歓ばしき学問」 近代的知に呪われた学問	渡辺幸博	4
「現代資本主義分析の課題」(置塩信雄著)	森岡孝二	12
「ピアジェ 晩年の思想」(三嶋唯義著)	中城 進	22
「セヴンティーン」(大江健三郎著)	江崎 明	30
評論 剝奪された関係性 ―その外延としての映画論	黒木貞雄	36
連載 日本中国 ことばの来往 その5	芝田 稔	42
北京で生活して (4)	鳥井克之	48
ポーランド―その歴史と風土 その2	松川克彦	58
新刊案内		62
お知らせ		63
編集後記		64

表紙・カット／グラフィック社刊『画集 日本のきりえ』

講談社刊『世界のグラフィックデザイン 2 ポスター歴史編』

題字／文学部教授 網干善教氏



原子力発電のデタラメな管理実態が明らかにされた。又、他方で「非核三原則」をアメリカが順守しているのか否かが問題化している。この二つの問題は、「原子力」の核分裂を応用した文明の産物という点では共通であるといえる。が、しかし、共通点はそれだけであろうか。

確かに原子力発電は、原子力の平和利用が目的で、核の問題は、核爆弾という軍事目的であると認識されている。しかし、この認識はオブラートに包まれすぎていると言えないか。例えば、エネルギーとしての原子力というものが、何の要請で誕生したのか、ということを考えるとも明確となる。資本主義的生産様式の下では、常に生産性と低コストは至上の命題である。大量生産して、尚克安価な製品を作り出すためには、同時に安易で安価な動力源が必要とされる。言わばその動力源として原子力発電が開発されたにすぎない。このことは公害が社会的にクローズアップされた時にも論議の対象とされたことであるが、どんな問題が発生しようとも、それを上まわる利益があれば、資本は資本の論理に従って利益を追求するものである。森永ヒ素ミルク事件の時にもこれはバクロされたし、ミナマタ病についても然りであった。

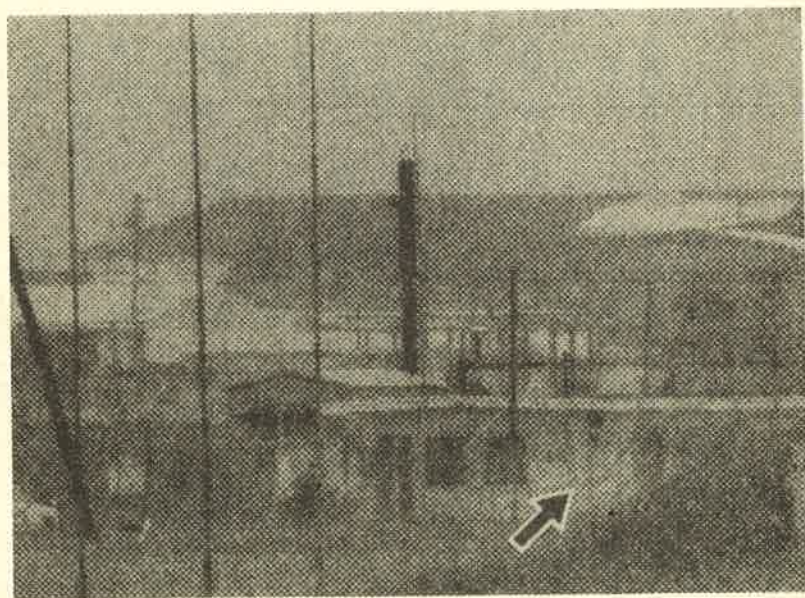
この意味において、敦賀の原発のデタラメな管理実態は全く同様な所に原因があるといえる。利益追求のため

には、労働者に何が起ころうと、地域住民にどんな影響を与えようとも関係はないのが資本の論理である。

核の日本への持ち込み等の問題も同様である。日本政府はアメリカの核の傘の下に入ることにより、軍事的安定を得ようとして来た。とすれば極東における核の傘たる空母が日本の基地に寄港するに、核ミサイルを外して入港する事等は軍事的にはありえないことである。軍事とは常にスタンバイの状態にあるからこそ抑止力を有するものであるからだ。とすれば、国会での首相の答弁は全く茶番劇であると言わねばならない。

問題を整理しよう。原発も資本にとつては経済的な侵略の武器であり、核ミサイルもその侵略を保障する武器である、ということだ。

このことは視点をかえてみるとより明白となる。例えば食糧問題だ。食糧そのものの特性としては武器的なものを持つていない。しかし、第一次、第二次世界大戦にしろ、食糧は最も有力な武器であったのは歴史的事実である。否、歴史的に見ればいけば人類の歴史の中で、最も多くの人々を殺して来た武器は食糧であった、といっても過言ではない。現代においても、赤道を中心にした南・北緯30度を境界線にして、その中に住む29億人の人の60%は、慢性的な飢餓状態にある。昨年度のユニセ





フの統計によれば、毎日3万人がこの地域では餓死していることになる。

この現実を利用して、ソ連、アメリカという超大国は食糧という武器を最大限利用して、これらの国々から欲しいままに搾取と略奪を繰り返している。別にここでヒューマニズムに基づいた一般的な国際主義を説くつもりはない。そうではなく武器としての食糧の有している意味を問いたいだけだ。

現代文明の技術力をもってすれば少くとも、現状の飢餓状況はなくせるだろう。原子力利用という高度の技術文明が他方で大きく開発されているにも拘らず、その同じ技術力をもってして、人類の食糧問題が解決されないとするれば、一体文明⇨技術とは何か、ということを根底的に問わざるを得ない。

再度、出発点に戻ろう。原子力発電も核爆弾も同じ資本の論理に従って武器として利用されている。同じく食糧も武器として資本の論理によって利用されている。だから資本主義生産様式が悪い、と言ってしまえばそれで終りである。しかし、もう一步踏み込んで、技術⇨文明とは何であったのか。技術開発する判断基準は何であったのか。否、技術⇨科学を開発する判断の内容を根本的に問い直す必要があるのではないか。

(F)

書評

叢書〈文化の現在〉11 『歎ばしき学問』 (岩波書店 一、八〇〇円)

# 近代的知に呪われた学問

渡辺 幸博

1

学問がすぐれて文化的であることは、いまさらいうまでもないが、本書に見られる学問論は二十世紀末現在の学問の置かれた状況を示すものとして、〈文化の現在〉を論ずるにまことにふさわしいものであると思われる。しかも、六氏のそれぞれに異なる論説は、さまざまな学問の在り方や問題点を指示しているだけに、いやでも〈学問とは何か〉という問いに、あらためて直面させないではおかない。

そもそも、「歎ばしき学問」という書名からして挑発的

である。おそらく編者の意図も、はじめから、そこらにあつたにちがいない。それは〈媒介者〉高橋氏の「〈歎ばしき学問〉なる文句を目にして、そこにいかなる皮肉をも感じとらない人がいるとしたら、それはよほど〈しあわせな〉つまり〈おめでたい〉人であると呼ばれるにちがいない」(本文三四頁)という言葉にも明らかである。それだけではない。高橋氏はつづけて、はっきりという「祝福されたしあわせな学問をするのが、愚かなおめでたい人間である以上、手放して〈歎ばしき学問〉を謳い上げることができぬのも確かである。アイロニーなしにはこの言葉を口にできぬところに、私たちのふしあわせ

があるのだ」(二二六頁)。そこには核兵器に象徴的な科学技術文明を生んだ、近代西洋の愚かしい(知)を継承する現在の学問に対する正しい認識が見てとられる。

にもかかわらず、あえて(歎ばしき学問)を論じなければならぬのはなぜか。本書の特色は現在の学問の負わされた(愚かしさ)を、皮肉まじりにやゆしたり、嘆いたりするのはなく、何とかその(愚かしさ)を脱しうる方向を模索しようとしているところにある。その意



味では、この「歎ばしき学問」という書名は、そのものずばり、(あるべき学問―歎ばしき学問)を志向しているということが出来る。もともと、その意図がどれだけ果たされているかということは別問題である。

ところで、共同執筆による一冊の書というものは、えてしてまとまりを欠くうらみがある。本書もその弊を完全にまぬがれているとはいいがたい。もちろん、執筆者はほぼ問題意識を共有していると思われるのであるが、それぞれ、専門の異なる諸氏の論説に、完全な首尾一貫性を望むのは、はじめから無理な話であって、編者の意図は、種々の説を提供して、判断は読者にまかせるということであろうと思う。いずれにしても、高橋氏の媒介者としての役割は、きわめてよく果たされていて、総体としての本書の特徴は手ぎわよく、明確にされているということが出来る。その意味では、本書はまず(媒介者)高橋氏の論稿から読み始めるのがよいかもしいれない。

## 2

本書の構成は執筆者の専門別に見ると、まず歴史学、社会学の二編、つぎに文芸、建築の二編と科学論、物理学の二編、そして終りに媒介者の一編、計七編の論説からなっている。以下(媒介者)のコメントをも参考にし



ながら、(歎ばしき学問)の実態を論者別に概観してみよう。

第一論説。阿部謹也氏は学問の愉しさを、きわめて明快に示している。冒頭の「学問の愉しさは発見の楽しさにつきる」というのがそれである。ここでいわれる発見とは「歴史や社会の価値秩序がときに逆転させられるような思いがけない関連が見えてくる」(いずれも本文十頁)ことを意味する。つまり、氏は自らの専門領域である歴史研究において、従来の定説をつき破るような、まったく新しい発見こそが、歴史学の愉しみにほかならないというのである。たしかに、この喜びは少なくとも、学問をこころざしたものには分らぬはずはない。しかも、歴史

はもともと、断片的で不完全な資料と一面的な判断によって成り立っているらしく、しかも、時代をさかのぼればのぼるほど、不明な点があまた存在するというのが常識である。いふなれば、学会の定説なるものも、新たな資料の一つでも現われれば、たちまちひっくり返される可能性があるわけである。歴史学は愉しさいっぱいの学問であるということになる。

ここで、阿部氏はテイル・オイレンシュピーゲルの原型となつている民衆本『テイル・ウーレンシュピーゲルの退屈しのぎの話』をもとにして、ただ、いたずら者として受けとられてきたテイルを、民衆本の成立した時代と社会に置きなおし、オイレンシュピーゲルとウーレンシュピーゲルが区別されなければならないわけを説いている。すなわち、危険な存在としての道化の存在を許さない近代社会が、ウーレンシュピーゲルの毒を抜きとり、子ども向けの作品に作りかえ、ワサビを抜いてしまったというわけである。氏は民衆本の中のいくつかの話を分析することによって、それらの話のそれぞれに、何らかの歴史的事実の核があること、そこには当時の人びとにとって、きわめて切実な問題であったものがテーマとしてもちこまれていることを明らかにするのである。高橋氏はここに(近代の知)を批判する(遊び)の精神を見



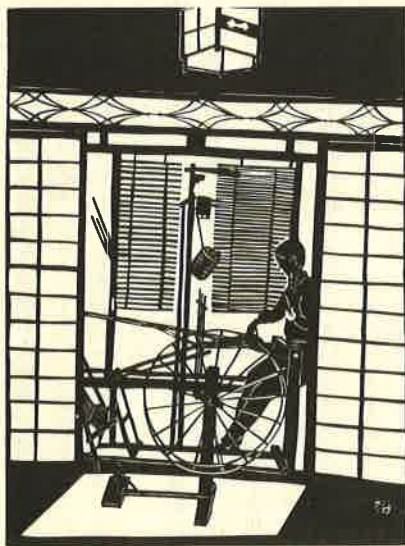
ている。もつとも、この場合の遊びは社会の虚偽を笑いのめす（自由な精神の遊び）であって、とくに阿部氏にとつて見落されてはならなかったのが（賤民の視点）であつたことが正しく指摘されている。

作田啓一氏の論説については、高橋氏がきわめて要領よく、その要点をまとめておられるので（本文五三頁以下）、ここでは内容の紹介をばぶいて、若干感じたことを述べておきたい。

一つは「ロマン主義を超えて」という標題についてである。おそらくそれは、ジンメルの貴族主義的な群衆観を超えて、二十世紀末の現代に応じた社会学の展開をめざすということを意味しているものと思われるが、いまひとつピンと来ないものがある。たとえ氏にとつては、きわめて当然のことではあつても、必ずしもすべての読者に、ただちにその意とするところが了解されるとは思われぬからである。もう少し内容に即した表現はなかつたものだろうか。

二つめは、群衆を（能動的で共同性をもつもの）とする氏の規定が、具体的には革命時の群衆などを意味しているとするれば、それ自体としては分らぬでもないが、これなどサルトルのいう融合集団にあたるものであつて、いわゆる集列体（群、たとえばバスを待っている人々）は群衆

ではないのであろうか、という疑問が残る。周知のように、サルトルは集団をたんなる群から區別して、そこに社会的自由の可能性を見ているからである。大衆社会が氏のいう群衆（サルトルの集団）と同質であるとすれば、大衆社会に希望を見いだすことができるのは、ある意味では当然であるということになるが、問題は果して、そのように見ることができようかということである。いずれにしても、氏のいう（学問の喜び）は、氏自身の脱所屬と脱自我という群衆概念でもって、現代の社会現象の多くを説明することができるという点にあるのではないかと推測することができる。



中村雄二郎氏のいうところも、その要点は高橋氏のま  
とめで見ていただくとして（二四六頁以下）、とくに私にと  
つて興味のあるところを一点だけ記しておこう。それは

中村氏が「演劇的知」によって「近代的知」が排除した  
ものを取り戻し、それらの豊かさを正当に回復するとこ  
ろに、新しい知の可能性を見ている点である。その場合、  
氏は新しいロゴスの基本的な方向を示すのが「イメージ」  
であるという。パトスの宇宙感覚、身体的動作、イメ  
ージによる象徴表現が「イメージ豊かな多義的な世界の  
なかで深層のリアリティを開示する不可欠の要件である」

（二〇七頁）というのである。氏のこの主張は、現在「精神  
医学、文化人類学、比較行動学、記号学などにおいて、  
知るものと知られるものとのいきいきとしたダイナミッ  
クな交流を生みだす感受性、直感、経験、演戯性が要求  
されてきている」（一〇八頁）事実と結びあわされるとき説  
得力をもつ。氏にとつて、学問が「歎ばしき学問」であ  
りうるであろうことが、これだけでも納得できる。

しかしながら、私はジョゼフ・W・ミーカーを介した  
高橋氏の「悲劇的精神は自然の生物学的環境を破壊し、  
人間の生存そのものを含めて、地球を危機に陥し入れて

いる近代科学技術文明を生み出した精神と別物ではない」  
（二四六頁）という言葉にくみしたい。「近代的知」のもた  
らした荒廃は、とても「演劇的知」で回復できるような  
ものではないと思われるからである。

原広司氏は「部分と全体の論理」を軸に、建築の論理  
を出発点として集落の研究にまでいたる。私などは「部  
分と全体」といえば、すぐゲシュタルト心理学を思いだ  
す。それは心的要素をどんなに集めても、心的事象の全  
体的特質は十分に説明されないということから、その部  
分の総和とは異なるもの、あるいはそれ以上のものでは  
あるゲシュタルトこそ第一的所与であるという考え方で  
ある。原氏の「部分と全体の論理」も、自立性を与えら  
れた「部屋」を集めるだけでは全体的建物にはならない  
ということから出発している。

氏はまず、近代建築を代表する三人の建築家の理論を  
紹介する。コルビジェの寸法体系による「建築の構成要  
素となるものの集合からなる壮大な置換可能な組み合わせ  
モデル」が部分と全体の関係を、部分集合の問題へと転  
換したにはかならないこと、そして、寸法の比によるコ  
ルビジェの考え方が、まさに工業製品を規格寸法によつ  
て生産する合理主義的世界であることが明らかにされる。  
ついで、空間を容器としてとらえることを拒否するライ

## 次号57号 原稿募集!!



テーマ●今日の韓国情勢。例えば、在日朝鮮

人作家の書評など。

字数制限なし。

締切り●七月三十一日

あて先●〒565 吹田市千里山東三―一〇―一

関西大学生協同組合

書評編集委員会

トの有機的建築が紹介される。建築は住むための容器ではなく、住むための場であるというライトの建築論が好意的に述べられる。いまひとつが特定の部分を消去するミースの均質空間論である。しかし、原氏は均質空間が管理者(支配者)の公認形式になりかねないことを示唆して、ミースの建築論を否定する。別の理論の探究が始まるわけである。その詳細については、高橋氏のまともにゆずらざるをえないが、集落の研究を通じての氏の〈部分と全体の理論〉は「秩序づけられた世界の構想が個性性に立脚していないとしたら、その秩序になんの意味があるだろうか(一四一頁)」という言葉にあるように、部分はその全体に解消しえないという結論に導く。全体があつて、は

じめて部分も記述できるという古典的形式が、こんちわれわれの表現行為、美学、社会像、世界像を毒しているものとして排されるのである。もつとも、このような遍歴のうちに原氏のものとなつた場に対する関心が、氏の建築論にどのようなあらわれるのか、ということについての具体的論述は見られない。またライトに対する共感と氏の場の理論とが、いかなる関連をもつのかという点についても、残念ながら明示されていない。ここでは、〈部分と全体の論理〉をめぐる氏の豊富な知識にいられた超越的論理に、現代的〈学問の楽しみ〉を見たといつておこう。

村上陽一郎氏の「自己の解体と変革」は（後めたき学問）、（退屈な学問）、（喜ばしき学問）の三つからなる。氏は学問にたずさわることによって、社会から何らかの形で安定した地位を保障されている人間の（後めたき）から始める。この後めたきは、同じ境遇にあるものは多かれ少なかれ持っていると思われるが、卒直に心情を吐露する氏の態度には好感がもてる。しかし、若干いわしめていただければ、氏が学問の必要性を云々するとき、すでに（近代の知＝有用性）の観念に毒されているような気がしてならない。（後めたき）の問題は富の配分の問題であつて、より徹底した分析を必要とする。私のいたいのは、有史以来、社会的富の正しい配分がなされたことはほとんどなかったのではないかと、ついでにいえば、学問もこの不当な配分に一役かつてきたのではないかということである。（後めたき）は、あるべき未来を展望することと結びつかなければ意味がないと思われるのである。

村上氏のいう（退屈な学問）とは「既成の枠組みを修得した上で、その枠組みの中で、その細部をより詳細に仕上げるという形をとる学問形態」（一八七頁）ということ

になる。もちろん、氏は実際にこのような学問のすべてが退屈であるといっているのではない。ここでいわれている退屈さとは、つぎに述べられる（喜ばしき学問）との対比でいわれているわけで、いうなれば、それがすでに見えているものを、あらためて確認する作業にすぎないということである。

かくて、（これまで見えなかつたものを見ようとする学問）が問題となる。そして、それが可能になるためには、すでに存在している枠組みの徹底した転換が必要になる。いうまでもなく、その転換は学問する者自身によつて行なわれなければならない。つまり、自分自身が変らなければならぬ。結論的にいって、村上氏はこの自己の変革（あるいは解体）にこそ（学問の喜び）があるというのである。そして、この学問の喜びが根元的に私的な性格をもち、学問するとは言葉の本来の意味におけるディレクタントにのみ可能であるという。つまり、自ら楽しむ人にしか学問の喜びはないというわけである。

この考え方は渡辺慧氏にも見られる。科学する第一の目的は知ることの楽しみにあるのであつて、人から賞められたり、有名になる楽しみでも、賞をもらう楽しみでもない。また、有用性ということよりも真実を愛することのほうが、科学を真に愛することになるというのである。

る。有用性は真理から必然的に生まれるのであって、要は真理を追求すればよいのだという考え方はよくある考え方で、たとえば西田幾多郎もたしか同じようなことをいつている。いうなれば、学問の純粋性こそ肝要であるということであろう。これはまた、科学の没価値性を称揚するということでもあろうが、そうはいっても、やはり自らの研究の結果まで考えなければ、無責任のそしりは免れえないであろう。とくに自然科学の場合は細心の心づかいが必要であると思われる。渡辺氏の考え方は、現代文明の危機の原因は科学にあるのではなくて、技術にあるのだという考え方にも通ずるのではなからうか。

つまり、問題は真理とか真実とかいう場合、それが何を意味するのかということであって、真理でありさえすれば自己破滅的な知であつてもかまわないということにはならないということである。渡辺氏の論には学問に對する絶対的な信頼があるようで、その点が私などには氣になつてしかたがない。氏が実学を奨励した明治の立身出世主義を批判しながらも、英才教育を主張することができたのも、その意味では不思議ではない。

もっとも、一方では、はげしい国際的經濟競争と、それに対応すべく官産学共同体による科学技術振興が依然として叫ばれ続けている。そして、この現況が続くかぎ

り、氏の論がきわめて現実的なものとして、一般的に歓迎されるであろうことは疑いない。しかし、学問が人類の未來に對する展望にもとづいてなされるべきであるとするならば、(近代的知)に對する疑問は、覆うべくもない文化の現在の事実として認識されねばならないのではないかと思うのである。

以上、六氏の説く(学問の楽しみ)について簡単に見てきたが、こんにち、考えることのできる(愉しき学問)の在りようは、高橋氏の言葉の遊びも含めて、ここにほとんど出そろつてゐるといふことができる。しかし、(近代的知)に對する(遊びの学問)のすすめには異議はないにしても、私は高橋氏とともに、(知)を呪つてみずからを盲にしたオイディプスの轍を繰り返さずに済むだらうかという疑問を捨てることのできないのである。

(わたなべ ゆきひろ・哲学科教授)

置塩信雄著

## 『現代資本主義分析の課題』

(岩波書店 二、〇〇〇円)

森 岡 孝 二

1

わが国の経済学文献において、表題に「現代資本主義」ということばを冠することが多くなつたのは、もう二〇年以上も前のことである。今日もまたある種の「現代資本主義」論ブームの時を迎えている。しかし、その基調はかつての「現代資本主義の繁栄」論から、今日の「現代資本主義の危機」論へと一転した感がある。

かつての「現代資本主義」論といえば、イギリス労働党の理論家J・ストレイチーが*Contemporary Capitalism* (邦訳『現代の資本主義』、関嘉彦・三宅正也訳、東洋経

済新報社)という一書を公けにした一九五六年の時点にまでさかのぼることができる。この書物のなかで彼はこう論じていた。すなわち、最後の段階の資本主義としての現代資本主義は、民主主義制度とケインズ政策のおかげで、マルクスの理論とマルクス主義の伝統的教義に反して、労働者大衆の生活水準を引き上げ、国民所得の分配を改善し、経済機構の安定性を高めることに成功した、と。

これ以降、わが国でも第二次大戦後の資本主義の新たな諸現象をめぐって、いわゆる現代資本主義論争が開始された。たとえば、長洲一二氏が海外のマルクス経済学者の論文を集めて『現代資本主義とマルクス経済学』(大

月書店)を編んだのは、一九五七年のことであった。また、五八年になると、雑誌『世界』誌上で、都留重人氏の論文「資本主義は変わったか」をめぐって国際論争がおこなわれた(都留重人編『現代資本主義の再検討』岩波書店 一九五九年、参照)。さらに、東洋経済新報社から『現代資本主義講座』全七巻が刊行されたのも五八年から五九年のことである。J・K・ガルブレイスの『ゆたかな社会』が公刊されたのもほぼ同じ時期(原著一九五八年、邦訳一九六〇年)のことである。

この当時は多くの経済学者や評論家が、「恐慌は過去のものとなった」、「貧困は克服された」、「失業問題は解決



した」と主張していた。マルクス経済学者のなかにもそうした主張に追随して、国家介入による資本主義の諸矛盾の緩和の可能性を肯定する者が現れた。そうでない場合にも、マルクス経済学は、種々の資本主義弁護論の攻勢を前にして、自らは守勢に立つて反論と防戦にまわらざるをえないような事態に直面させられていた。

ところが、今日では事態は一変している。変化の兆しは一九六〇年代の後半に現れはじめたが、はっきりとした転機は七〇年代の幕明けとともにやってきた。アメリカ帝国主義のベトナムにおける敗北、ドル危機の深刻化と国際通貨危機の激発にともなうIMF体制の崩壊、環境破壊の深刻化に続いて起った石油危機と全般的な資源・エネルギー危機、世界的な恐慌とその後のスタグフレーション、「完全雇用政策」下の財政危機と失業増大、等の七〇年代前半に生じた諸現象は、一九七〇年代が、資本主義世界体制の全線にわたる危機の新たな成熟という点で、一九三〇年代や第二次大戦とならぶ新しい「現代」の始まりであることを物語っている。また、これらの諸現象は、今日の資本主義が、高度に発展した生産力を管理する能力も、持続的で均衡のとれた経済成長を保障する能力も、貧困問題や失業問題を解決する能力も欠いていることを、以前のいかなる時代にもましてはつき



りと示している。

いまや、かつての「恐慌消滅」論や「ゆたかな社会」論の破綻は明白である。しかし、このことはマルクス経済学の成功を必ずしも意味しない。たしかにマルクス主義的な思考と分析への期待はかつてなく高まっているが、資本主義の危機を示す一連の諸現象をマルクス経済学が首尾よく説明しえてきたわけではない。現在の社会主義における否定的諸現象の顕在化も、マルクス主義にたいし種々の検討課題と反省材料を提供している。そうしたなかでマルクス経済学の現代的な再生と発展がなるかどうかは、一九八〇年代を迎えていよいよ危機を深める現代資本主義のトータルな分析に成功するかどうか、ま

た、それをつうじて社会の全成員の完全な福祉と自由な全面的発達をめざす社会主義への途を呈示しえるかどうか、かかっている。

こう述べるとき、筆者が念頭においているのは、岩波書店から現在刊行中のシリーズ『現代資本主義分析』のことである。同シリーズ全十四冊の企画の意図は、置塩英雄、佐藤金三郎、高須賀義博、本間要一郎の四氏が名を連ねた「編者のことば」を見るかぎり、筆者が右に述べた問題意識とほとんど異ならない。それゆえ、この企画に託された課題と期待については多言を要しないが、既刊の数冊を目にしたかぎりでは、わが国のマルクス経済学は、かつてのような輸入理論の消化と資本主義弁護論への応戦に追われていた段階を脱して、現代資本主義論あるいは国家独占資本主義論という経済理論の主戦場においていまようやく自力で前進を開始した、という印象を得た。全十四冊の「序説的総論」にあたる置塩氏の『現代資本主義分析の課題』を読んだの印象はとくにそうである。

## 2

置塩氏は、『再生産の理論』（創文社、一九五七年）を著わして以来これまでに、『資本制経済の基礎理論』（創文社、



一九六五年、増訂版（一九七八年）、『蓄積論』（筑摩書房、一九六七年、第二版一九七六年）、『近代経済学批判』（有斐閣、一九七六年）、『マルクス経済学——価値と価格の理論——』（筑摩書房、一九七七年）、などの諸著作を発表してきた。近著の『現代資本主義分析の課題』は、これまでの一連の著作で積み上げてきた理論を、さらに平明にこなしくだいて展開したものである。

本書においても著者は、これまでの著作がそうであったように、自らが立脚するマルクス『資本論』にたいしても、著者の独擅場ともいえる近代経済学批判においても、正すべきは正し、採るべきは採るといふ批判的姿勢を貫いている。著者はまた、問題の性質に応じて数学的推論をたくみに用い、あれこれの経済諸量間の相互関係を可能なかぎり簡單明瞭に証明しようとしている。『資本論』が与えている法則のいくつかはそれによって明証され、あるいは訂正される。その点にかぎらず、著者がマルクスの仕事から最大限に学ぶというときの学び方は、きわめて原則的であると同時に、きわめて大胆かつ斬新である。

だが、本書には単に著者の多年の研究成果やその独特の持ち味が生かされているだけではない。本書の最大の特色は、マルクス経済学の立場から現代資本主義の危機

の原因を理論的に究明することにある。著者のいうように「現代資本主義の危機は……資本主義そのものの内的な運動の必然的な結果として生じたもの」（1ページ）であつてみれば、考察の出発点は当然にも資本主義という経済制度の内的な仕組みを明らかにすることではなければならない。本書が第1章「資本主義の基礎構造」、第2章「現代資本主義の基礎」、第3章「現代資本主義の動揺」という構成をとり、第1章のはじめに資本主義の生産関係や生産力の特徴を論じているのも、右の理由による。

このように資本主義のもつとも基本的な仕組みから説き起していることは、本書を初學者にも読みやすいもの



にしている。しかし、教科書形式のマルクス経済学の入門書とは異つて、資本主義の基本的な生産関係を論ずるにしても、理論的な照準はあくまで現代資本主義の危機の原因を究明することに（あるいは原因究明のための予備概念を獲得することに）ある。

この親的からみてまず第一に注目すべきことに、著者は、資本主義の生産関係の特質を論ずる際に、「生産に関する諸決定」の問題に特別に重要な意義を付与している。著者によれば、歴史上の特定の社会を特質づける主要な生産諸関係のうちで基本的なものは、「社会の諸構成員のうち誰が生産に関する諸決定をにぎるか」（2ページ）であるという。資本主義についていえば、社会の少数者である資本家が生産手段を孤立・分散的に私有していることに対応して、生産に関する諸決定は個々の資本家がそれぞれ部分的に私的ににぎっている、ということになる。資本主義の特質をこのように「生産に関する決定」の特質においてとらえることは、著者が第1章第2節に「恐慌の必然性とその意義」を論ずる場合にも重要な意味をもつてくる。そこでは恐慌が単に商品の過剰生産ではなく、「累積的一般的過剰生産」であることが確認されたうえで、その発生条件として、商品生産（販売と購買の分離）および労働者の搾取（生産と消費のギャップ）のほ

かに、「蓄積の決定が私的資本に孤立・分散的にぎられている」（28ページ）という事情があげられている。ここでは資本家たちが剰余価値から生産財や労働力を追加的にどれだけ購入するかを個々ばらばらに決定することが、不均衡（過剰生産や過少生産）が生ずる原因と把握されているのである。この場合、不可避免的に生ずる不均衡がなによえに累積的に進行するかが問題となるが、それについても著者はつぎのように言う。すなわち、「資本主義において無政府性のゆえに発生した不均衡が累積するのは、蓄積需要を決定する個々の私的資本が、蓄積需要の決定において、視野の短い近視眼的決定態度をとるからである」（29ページ）、と。

### 3

現代資本主義の危機の原因究明という課題に照らして、第二に注目すべきは、本書における生産力の取り扱ひである。第1章では、著者は資本主義の「生産力下限」と「生産力上限」とを確定することに意を注いでいる。また、それに関連して、マルクスがあたえた資本の「技術的構成」と「有機的構成」という二つの概念の相互関係をより正確に規定しなおしている。それによれば、マルクスは資本の有機的構成を不変資本Cと可変資本Vとの比率、

すなわちCVで表わしているが、マルクスが充用される生産手段量とその充用に必要な労働量との比率を資本の技術的構成と呼び、有機的構成は技術的構成の変化に規定されかつその変化を反映するものとみなしていたことを考慮に入れるなら、有機的構成の指標としては不変資本に投下された労働C（死んだ労働）と直接投下された労働N（生きた労働）との比率、すなわちCNを選ぶのが合理的である、とされる。こうした有機的構成の把握は、著者が第1章第3節「生産方法の変革とその帰結」において、マルクスが展開した「利潤率の傾向的低下法則」や「相対的過剰人口の累進的増大」の理論がどの点で完璧であり、どの点で不十分であるかを数学的推論を用いて示す場合にも、重要な役割を演じている。

その数学的推論も興味深いが、それ以上に興味深いのは、「生産力の上限」に関する考察である。著者は、一方では、資本主義は不断に生産技術を進歩させ、生産力を上昇させるメカニズムをもっていることを強調する。と同時に他方で、著者は、資本主義は私的決定にゆだねられた利潤めあての生産以外の生産の仕方を知らないことを強調する。実際、富の無限の増大を保障しているかみえる資本主義は、富の源泉である人間と自然を疲弊させ破壊することなしには富を増大させえない体制であり、

環境破壊を防止するための生産にたいする合理的規制や共同的統制の機構を欠いた体制である。そうであれば、「生産の社会的性格が一定限度を超えて著るしくなると、資本主義の生産関係は機能しえなくなる」(56ページ)にちがいない。では、「資本主義のルールが機能しえなくなる生産力の水準の上限」とはなにか。現代の生産力の水準はすでにその段階に達しているか。

著者はこの設問にたいし、(1)自然の大局的 (global) 変化を可能にするまでの人間の自然にたいする制御能力の高度化、(2)剰余労働に対する強制を不要にするまでの剰余生産物の著しい増大、(3)私的に調達できる限度をこえるまでの巨額の労働および資源の調達の必要性、(4)精神労働と肉体労働との分離を困難にするまでの人間の情報処理能力の増大、(5)人類の協力・協働関係を不可避にするまでの生産の全面的社会化、などを上限基準とし、つぎのような判断を下している。

「このようにみてくると、現代の生産力の水準は、資本主義の生産関係や生産のルールが定着し、機能しえなくなる水準に達していることが分る。にもかかわらず、われわれの社会は現在なお資本主義であり、生産に関する諸決定は私的・分散的に行われ、社会の構成員の大多数は決定から排除されつづけている。そこでは、どのよう

な現象が生じざるをえないだろうか。(61ページ)

4

右に引いた第1章の結びの一文は、第2章の「現代資本主義の基礎」においては国家による資本主義的生産関係の強力的維持のことが問題になるであろう、ということとを予想させる。実際、第2章では、著者は現代資本主義の特徴を少数巨大企業の独占と国家の全面的介入とに求めたうえで、より一般的に生産関係の維持・再生産における国家の役割を考察するところから出発している。

ここでも著者が重視しているのは、「生産に関する決定」の問題であって、「国家はその公権力を、イデオロギー装置、法的装置、暴力装置の三側面から行使することによって、社会構成員の大部分を生産に関する決定から排除する」(69ページ)、だが、著者のいうには、現代資本主義における国家の役割は、生産関係、所有関係の維持や労働力再生産の確保にとどまらない。以前には私的資本が自由な決定を下していた資金調達、生産手段、労働力の購入、生産、販売、等々についても現代資本主義は国家の介入なしにはやっていけなくなっている。「国家の経済への全面的介入というのは、国家が独占資本主義の再生産過程のすべての重要な環において独占資本の利益



を擁護し、独占の支配を維持・強化するということである。そのためには単に市場創出に留まらず、資金調達、労働力・原料確保、新技術導入、需要注入などの諸点で国家の介入が不可避となる」(95ページ)。

資本主義における経済への国家介入を市場創出、有効需要注入の面から正当化すべくその理論化をはかったのは、いうまでなくJ・M・ケインズである。本書の第2章第2節ではケインズに關説しつつ「有効需要政策の限界」を論じて、現代資本主義の危機の一環をなす加速的インフレーションやスタグフレーションの問題にまで考察をすすめている。その際の著者の真骨頂は、単に数学的推論の活用にあるだけでなく、現代資本主義の危機を、

労働者階級と資本家階級との利害対立と闘争から、さらには資源供給国と独占資本主義国との利害対立と闘争から、醸成されてくるものとしてとらえていることにある。いまそのくだりを要約的に述べれば、加速的インフレーションは、通貨量の増大を手段とする名目的総需要の増加が貨幣貸金率の上昇率をこえた率で行われることによつて生ずる、他方、各目的総需要の上昇率が貨幣貸金率の上昇率より低い場合には、スタグフレーションが生じて、物価は上昇しているのに、生産、雇用、利潤率は低下していく。こうしたジレンマが生ずるのは「通貨量の決定、名目的総需要の決定が独占資本や彼らと密接に結びついた政府によつてにぎられていることによる」。

「労働者階級は加速的インフレーションに対する闘いのなかで、次第に貨幣貸金率の引き上げだけでなく、通貨量、名目的総需要量、稼働率の決定に眼をむけ、これを規制し、さらには、彼らからこの重要な決定を奪いかえすことを意識的に追求するにいたる。それは、資本主義的生産関係の中軸を危機にさらすことになる」(135-136ページ)。

この見地は第2章第3節に「成長の限界」を論ずる場合にも堅持されている。そこでは、いわゆる物価・賃金スパイラルについて、つぎのような説明がある。すなわち、それは①資本家階級の資本蓄積率が異常に高く、②

労働者階級が異常に低い実質賃金率を甘受するほどに弱くはないが、③労働者階級が蓄積に関する資本家の決定に介入して、資本蓄積率を低めるほどには強力でないことから生じている。その意味で賃金・物価スパイラルは労働者階級と資本家階級との階級闘争の一形態である、と(151ページ)。

## 5

本書が現代資本主義の危機を意味する諸矛盾を歴史的具体的に論じているのは、第3章「現代資本主義の動揺」においてである。そこでは著者は、一九六〇年代までの戦後資本主義の高成長を支えた諸条件と、その消滅とともに一九七〇年代に入つて一挙に噴出した諸矛盾とを国際的な連関において考察したうえで、「危機からの脱出口」に論及している。

もとより、現代資本主義が陥っている困難を、現状維持的な方向で打開することは、労働者階級や開発途上国の諸民族にとつての危険をいっそう深刻にすることを意味する。ここでも問題は労働者階級や開発途上国の諸民族がアメリカをはじめとする各国の独占資本から「生産に関する諸決定」を奪えるか、奪う以前にもそれらの「諸決定」を規制しうるかどうかにかへ帰着する。そうしうるし、



そうしなければならぬというのが著者の回答であるが、その回答を出す前に著者は、「スタグフレーションの発生メカニズム」とスタグフレーションにたいする「政策」を問題にしている。その際に著者は、労働者階級の立場に立った政策を考えるには、経済諸量のあいだの関連を明確にしておかなければならない、という。具体的には、

- ① 利潤率と実質貸金率、資源の実質価格の間の関連、② 利潤率の水準が生産能力の稼働率を規定するという関連、
- ③ 社会全体の実現利潤率の水準と、資本蓄積率、財政支出超過率、輸出超過率の関連、がそれである(202頁、203ページ)。

資本金階級の要求利潤率や、労働者階級の要求実質貸金

率も考慮すべき重要な要因として入りこむ。これらの一連の経済諸量がいかなる関連を有する場合にスタグフレーションは生じるのか。労働者階級はこれらの経済諸量のいかなる水準での組み合わせを独占資本にたいしてせまるべきなのか。これらの重要問題についての著者の理論展開と政策提言をここに紹介するゆとりがないのは残念だが、労働者階級の立場に立った経済理論と経済政策との結合とは、おそらく本書が与えているような分析のことをいうのであろう。

この著者にしてなしたことはいいえ、本書は最後に現代資本主義の社会主義的変革の必然性を論じ、また、変革の契機と主体の形成を説いて、きたるべき「新しい社会」を展望している。この個所では読者は、本書が最初の第1章第1節から最後の第3章第3節までみごとに論理一貫的に構成されていることに驚かされるにちがいない。と同時に、著者は「新しい社会」について論じることによって、実は現在の資本主義の特質とその諸矛盾を問題にしているのだということに気づかされるにちがいない。たとえば、著者の貧困あるいは窮乏についての理解はここでこそ開示されている。それによって著者は「新しい社会」への移行を担うのは、現行の生産関係のもので生命の脅威、生活苦・生活不安、精神的窮乏を押し

つけられている人々を統一させ、組織し、方向づける能力をもった労働者階級である、ということにより説得的に示そうとしているのである。

順序が逆になったが、論理の一貫性という点では、著者は、はじめに資本主義の矛盾を生産に関する諸決定が私的・分散的に私利利潤を基準にして行われるという点に求めていた。本書の結びでは、著者はこの矛盾の止揚から生まれる「新しい社会」の特質を、生産に関する決定が社会的・公共的に人間社会の存続を基準として行われる点に求め、現存社会主義の諸困難をも念頭におきながら、社会主義における決定の所在や性質について詳論している。そうだからこそ、著者は本書をつぎの結語でしめくくっているのである。

「新しい社会には、新しい矛盾がある。だから、人間の生存に関わる生産に関する決定を、やはりいままで通り私的な決定者にゆだね、私的決定者は私利利潤を基準として決定を下し、それから生じる自然や社会に対する諸影響がなんであつても、利潤が実現すればよしとする資本主義を維持するのか。それとも、現在の人間の自然制御能力にふさわしく、生産決定を社会的・公共的なものにとりかえし、新しい社会をつくり、その新しい社会で出てくる諸問題を人々の知識と努力を傾けて解決してゆ

くのか。-後者の途だけが、人間の存続を保障し、人間を真に自由にする途だとしたのはマルクスである」(248-249ページ)。

6

注文の二つや三つはつけてやろうと取りかかってみたものの、結局それもできずにこの書評を閉じなければならぬ。正直に言つて、現代資本主義分析の課題を究明する際の置塩氏の経済理論の視野の広さと分析装置の確かさには圧倒される。しかし、これを別な所からみれば、わが国のマルクス経済学は、かつての現代資本主義論ブームの時から今日までの間に、こうした総合的で全面的な思考と分析を可能とするような財産を、『資本論』の再発見を通じて、あるいは近代経済学との対抗のなかで、蓄積してきたともいえる。そのことは、本書につづく『現代資本主義分析』シリーズの著者たちが証明してくれらるであらう。

(もりおか こうじ・経済学部助教授)

— 書 評 —

三嶋唯義著 (行路社)

『ピアジェ・晩年の思想』

中 城 進

コンパの時間待ちで、某書店を散策していると、ふと私の目にとまる本があった。それがこの本である。日頃、自分の研究テーマとしてピアジェに馴染んでいる私は、この『晩年の思想』という副題に引き付けられるものがあつた。現行のピアジェ理論の発展の可能性というものを考えていた私は、このピアジェの晩年の思想がその可能性を暗示し得るものではないだろうか、と思つた。また「思想」という表現をとつているので、ピアジェが高齢故に、人類社会への遺言としての思想を表明したのだろうか、と思つて私はこの本を引き抜いて読み初めることにした。目次をめくり、序言を、あとがきを、そして

本文を読むうちに、大いなるショックを受け、それからこの本の真实性を疑い出した。立ち読み専門家を自称する私ではあるが、思わず心的動揺で購入してしまつたのである。

この本は五章より成り、雑誌論文からの転載などに手を加えて一冊の本にしたこともあつて、最初から終りまで順を追つて読むには、それなりの知識を持つていないと読み難いという難がある。ピアジェの生涯と学説の祖述・紹介と、その現代的意義、一九七五年以来のピアジェ理論の転向を論じた論文、そしてピアジェ理論の発展としての著者三嶋唯義氏の『言語図式の理論』とから構



成されている。まず、順を追って第一章から紹介しつつ、若干の感想などを交えて行きたいと思う。

第一章は、『ピアジェ、その生い立ちと学説』となっており、なぜピアジェが哲学や生物学よりも心理学・認識論を生涯の研究課題に選んだかを記している。少年期から青春期にかけてのピアジェに影響を与えたものとして、ベルグソン (Henri Bergson, 1859—1941) の『創造的進化』(1907) であり、またスペンサー (Herbert Spencer, 1820—1903) やル・ダントック (F. Le Dantec, 1809—1917) からも影響を受けたと記されている。それから少し後に、パリに滞在して、ピネ (Alfried Binet, 1857—1911) の所で実験心理学と児童心理学を

# 「読者の広場」 に君も 投稿を!!



投稿される方は……

学び、ブランシュヴィク (Leon Branschvicg, 1869—1944) やラランド (Andrie Lalande, 1867—1963) の指導で論理学と科学哲学を学んだといわれている。この際に、ピアジェは発生的方法 (methode genétique) を身につけ、彼の課題である、終生の課題となったのであるが、『認識』の問題を発生論的にアプローチするという態度を身につけたのである。

この発生的接近法は、哲学固有の思弁的・反省的な認識に打撃を与えるものであり、実は私自身も哲学への不満からピアジェのこの接近法に好意を持つものである。思弁的哲学は、人間の経験的諸事実に、時として、目をつむり、高邁な理念と啓示と根拠のない自己への強い

● 八百字以内。『書評』に対する意見、要望、苦情等、なんでも結構です。

● 原稿は返しません。必要な場合はコピーを。

● 連絡先 〒565 吹田市千里山東三丁目一〇一

関西大学生協同組合

書評編集委員会 ☎三三八一

一一二二(内線 四八二二)

断固たる確信に基づいて展開されるのではあるが、それに対してピアジェのこの発生的接近法による認識論は、あくまでも事実に基づいて組み立てられるべきものであり、科学的な認識論であるといえよう。

が、しかし、ここで充分気を付けたいのは、ピアジェは実証主義者ではないということである。「ピアジェによれば、実証主義は確かに一種の認識論ではあるが、しかしそれは『法則』の確証を主眼とし、『主観』の活動を無視あるいは度外視する学説であつて、『主観』の活動の役割』を強調するピアジェの立場とは根本的にあいれないのである。」と著者は述べている。

そうして、ピアジェは児童における心理学的諸研究を次々と発表して行つた。例えば、『児童における部分概念発達の諸相に関する試論』(1921)、『児童における論理的乗法と形式的思考のはじまり』(1922)、『児童における言語と思考』(1923)、『児童における判断と推理』(1924)、『児童の世界像』(1926)、『児童における実在の構成』(1937)、『児童における量の発達』(1941)、『児童における数の発生』(1941)などがあり、まだ数多くの論文がある。

これらの児童心理学研究の論文は、最初からすべて発生的認識論研究の一環としてなされていたものである、と著者は記している。児童をよりよく知り、学校教育の有

り様を改革したりする意図はなく、あくまでも認識の研究の方法として、『発生』の問題として、児童の精神発達の解明にむかつたのである、と著者はピアジェの研究を明確に述べている。

著者は、心理学の研究、発達心理学をはじめの場合、次の四つの問題が考えられるとしている。

一、精神発達において、例えば、『個体発生』は『系統発生』を繰り返すか。

二、個人心理学の主題が『個体』に存する以上、生物個体の環境への身体的『適応』や『同化』と同様のことは、精神発達に関しても考えられないだろうか。





三、『身体的発達』と『精神的発達』との間にアナロジ  
ーは成り立つか。

四、子供から大人への精神発達は漸進的連続的である  
のか、それとも非連続的であつて子供と大人の精神構造  
は異質的であるのか。

これらのことから、ピアジェの発生的認識論は、

一、『機能的同化』の説

二、『均衡』理論

三、『構造』理論

という三つの基本原理を根底に据えて、成立すること  
になつたと、著者は述べている。

ここで、私達が充分気を付けなければならないことが  
ある。一つの前提を置き、物事にアプローチして行くこ  
とは、科学の一つの有効な方法であるのだが、忘れては  
ならないのはそのやり方で、私達に未知であつた多くの  
ことが私達の手に入ったとしても、それはある一つの前  
提に基づいているということだ。私達は往々にして、こ  
のことを忘れてしまうのである。忘れてしまつて、ある  
一つの前提の上に立つたものが揺るぎない真実であると思  
い込む。この現象、出来事に警告を発したのは、フッサ  
ール (Edmund Husserl, 1859—1938) である。

私達は『科学』という名に、思わずその『真実性』を  
無批判に受け入れる。『科学』という名で、その前提の段  
階において非科学的な決定がなされ、その『科学』の方  
向を決められているという事に気づかない。実は、私も  
先ほど『科学的な認識論』と声高々に述べたのだが、一  
つの前提に立つてのことなのである。前提の有効性、妥  
当性をいかにして判断するかが、今の私の問題でもある。  
有効性、妥当性と言ひ、普遍性と言わぬ所に、実は、  
既に、逃げ道をつくつているのであるのだが。

第二章は、『ピアジェ論考』となっており、『ピアジェの経歴』、『発生的方法』など、一章と重複するものがあるが、ピアジェの発達心理学の特徴を手短かに記している。それによれば、ピアジェの発達心理学は、十九世紀的進化論と軌を同じくするものであり、つまり固定される発達法則と直線的発達とを大前提に据えて発達の順序とおのの心理的発達段階を非常に重要視するということであり、その際に、

(一) いったい発達は同型的であり、

(二) 常に途絶える(断絶する)ことがなく、

(三) しかも前進的である、

という三つの小前提が暗黙にあるいは表明的に提出される、ということである。

第三章の『ピアジェと現代』では構造主義に触れている。この章は、現代思想4 1978・特集Ⅱピアジェ・現代心理学入門からの転載である。この本を構成する論文ではない。

第四章は、『ピアジェ理論の転向——新しい発生的認識論とその方法的諸問題』である。この章の論文は、著者が1976年6月に著者の恩師であるところのピアジェをジュネーブの私邸に訪問したときの対話をもとにして書かれたものであるという事である。また、この本の出



版の動機もその対話にあると著者は述べている。

著者はピアジェ理論を四つの時期に区別している。「原始心性の自我論的・構造論的研究をおこなった第一期(1923年〔27歳〕—1932年〔36歳])『操作』と『図式』の観点から児童の心性を研究した第二期(成熟期)(1945年〔49歳〕まで)、心理学を捨てて発生的認識論研究に徹して知能発達の『三段階説』をとり、『規範的諸事実』を重視して、自己の全理論の集大成ならぬ再検討・再構成に取りかかるまでの時期(完成期)(1975年〔79歳〕まで)、そして自己の理論の再検討とひそやかな改訂に取りかかった第四期(晩年)、である。」と、著者はピアジェの理

論が四つの時期により異なっているとされている。

この第四期の『ひそやかな改訂』は、ピアジェの育成した鬼っ子学者、クリスチアーヌ・ジエロン (Christiane Gillieron) から、『ピアジェ理論は重大な方法的欠陥を含み、転倒されることによって正置されるべき理論である。』という痛烈な批判が動機であり、その改訂はピアジェおよびジエロンと著者との共同討議として進んできたということである。

ピアジェ理論の転向とは、その一つは、進化論の提題に立った理論、つまり固定した心理発達法則が人間に内在し、先に発現した機能は後に発現すべき機能の基礎構造をなすという理論を撤廃し、そして、後に発現すべき機能が先に発現する機能に前成的・潜勢的に内在して、これに『規範』として働くという提題に立ったことであ



る。つまり、現在と未来を決定するものが過去であったのに対し、未来が現在を決定づけようとするという命題であるといえよう。

またもう一つのピアジェ理論の転向の一つに、知能の発達段階説の廃棄がある。今まで、ピアジェの知能発達段階説は、通説として大きく分けた場合、『感覚運動期』、『前操作期』、『具体的操作期』、『形式的操作期』の四段階説をとっていたが、『感覚運動期』を削除して三段階説にした。これは操作という視点に基づいたものであり、ピアジェが心理学の研究に取り組んだ動機、つまり「ものを認識する知能の働きを、『操作』という観点から解決する手段を見つけ出そうとする関心」からであり、いわばその関心に戻るものといえよう。

しかし、操作という立場から認識論を考えて行くという転向は、前進ではなくてむしろ後退であるように、私は思う。概念の操作の研究がピアジェの認識論に対する問題意識であったのであろうか。もちろん、操作という立場からの分析は必要なのではあるのだが、それ以上に人間の認識過程をその生誕の時から追って研究するということにピアジェのピアジェたる所があり、認識論の新しい道を切り開いたとされる高い評価があつたのである。私には発生的でなくなったのかという疑問がある。

また別のピアジェ理論の転向点は、「『個体発生は系統発生を繰り返す』という進化論の提題に則した、個人の精神（知能）発生と発達とは人類文化（学問）の発達史に合致する、という基本的設定の撤廃である。」と著者により述べられている。

以上、二点ほど転向があるが、著者の説明が読者が（特に心理系の読者にとつては）納得するまでには足りないように、私には思える。何故に前提を取り変えたのであろうか。廃棄された前提は、何故に廃棄されたのか。その理由が定かでない。また新しい前提が明確でなく、また目的論的な所に前提を置きたがっているように私には理解できるが、その根拠が定かではない。

また、その転向にあたってピアジェは『規範は事実を構成する』ことを基本設定し、『規範的事実』という新しい概念を認識論に導入したと著者は述べているが、『規範的事実』という説明に釈然としないものが、私には残る。また『規範は事実を構成する』という命題に、つまり事実に対する規範の優先性ともいうべきことにも疑問を強く感じる。もつとはつきり言うならば、ピアジェがピアジェでなくなつて、ピアジェがカントにでもなつたような気がしてたまらないのである。ピアジェ（著者のいうには）や著者のいう『規範』とは一体どういう意

味合いで語られているのだろうか。『規範』の成立こそは経験により構成されるという考え方をピアジェは全く放棄してしまつたのだろうか。ピアジェの後期の研究から考えれば、この転向も充分考えられないでもないが、しかし、『規範は事実を構成する』という命題を、どういう根拠に基づいて立てたのだろうか。私には古くさい実在論の復古として映る。

この本を貫いて著者が幾度も強調することは、ピアジェは心理学者ではなくて哲学者である、という事である。またピアジェの仕事も心理学ではなくて、実験哲学だと著者は述べており、心理学者や教育学者たちはピアジェが提出している細心な記述とピアジェの解釈の真意を読み取っていない、と厳しく批判している。そして、ピアジェの道を歩む者は著者であり、それを越え行く者もまた著者であるという自負は理解できないでもないが、もう一つ納得がいかないものである。著者の指摘する事がさらに明確に、具体的に表明されるべきであらう。心理学者でなくて哲学者で仮にあつたにせよ、心理学の研究はしていたと私には思われる。ピアジェ転向の説明も、詳細に論じられなければならないであらう。実験の解釈も思弁的すぎる所があるように、私には思えるが。（保存）  
少しく、保存の所を考察してみる。『保存の証明は物理

学的証明ではない」、「二つの粘度塊が等しい量（おなじ量）を有するのは、『そのことが論理的であるから』である」と著者は述べている。この解釈はまさに実在する論理規則に子どももの知能（精神）が従うというものであり、子どもがある時突然論理規則に目覚めるかのように考えられているのではないかと思われるほどで、発生的ではないように思われる。また、この解釈は論理をすでに形成した大人からの解釈である。環境と個体との相互作用で論理が形成されて行くという考えではない。

第五章は『言語図式の理論』で、これはピアジェ理論の発展・援用により展開された著者の理論であると述べられている。『まえがき』と「あとがき」によれば、この著者の理論こそは、ピアジェ理論を越えるものであり、改訂ピアジェ理論そのものである、という事だが、私にはその真偽がよくわからない。

手短かに紹介して来たが、もし著者三嶋唯義氏のように、転向がピアジェにおいてなされていたならば、まことに著者の言い分どおりピアジェ理論は壊滅的打撃を受けるかも知れない。しかし、転向した『所』が全て正しい真理の場であるという所には、ピアジェ理論を教説として受け取って来た人々と同じ「語り口」が感じられる。何故転向なのかを、もっと詳しく著者は書くべきで

ある。私には感性で、いわばフィードバックで、ピアジェの転向が語られているとしか理解できない。以上批判する点も多いが、知的刺激は充分あり、心理学や教育学を学ぶ者には一読の価値があると、私は思う。

（なかじよう すずむ・大学院教育学専攻）

— 書 評 —

大江健三郎著

『セヴンティーン』

江崎 明

『セヴンティーン』は、大江健三郎の作品のなかでも、きわめて異色な作品である。この小説は、大江健三郎の近作に見られるような「非文学的、反文学的、あるいはまた奇妙な造語」に満ちてもいず、豊饒なイメージも、主題の難解さもない。あるのは現在の大江健三郎からは考えもつかぬような、きわめて現実的、社会的なリアリズムである。

作家大江健三郎は周知のように昭和三十二年、『奇妙な仕事』によって文壇にあらわれ、翌三十三年、『飼育』で芥川賞を受けた。大江健三郎自身は、作家というものの、「社会にかかわる意味あいについて、明瞭な考えをそ

なえていたのではなかった」、しかし「社会に背を向けて、自分自身の内部の暗闇に堅穴を掘ろうとして」、「その堅穴を掘りすすめた向うには、社会が実在しているのだ」、「そしてその社会とは、現代のそれにほかならず、しかも真の、現代の社会であるとひそかに信じて」小説を書く仕事を始めた。そして実際、初期の作品には、サルトルの濃い影響の下、現実生活で方向を失い、絶望と徒勞とに満ちた現代の人間のありようが、みごとに描かれていた。さらに長編『芽むしり仔撃ち』『われらの時代』を経て、一方で豊かな抒情性をみせ、一方で現代の青年のすがたをとらえてみせた。大江健三郎自身も、昭和三十五



年、〈安保批判の会〉(若い日本の会)に参加、『遅れて来た青年』そしてこの『セヴンティーン』などで政治的なもの、性的なものを作品の中央にすえ、それらを通じて現代の、現実の社会に激しく接近した。しかし、『牧歌的な少年たちの作家』から『反牧歌的な現実生活の作家』になることをえらび、性的なものを通じて現実に切りこもうとした『われらの時代』は激しい批判と攻撃を受け、また浅沼社会党委員長刺殺事件を踏まえた『セヴンティーン』は、右翼団体からの脅迫をうけた。そのすぐあとの長編『叫び声』は、小松川事件というやはり現実の強姦殺人事件に材を得ながら、作品の大半を現実とは切り



はなされた、独自の内的世界を設定することのみにのみついやし、短編においてはまだ少し現実性を残しながらも、『日常生活の冒険』『万延元年のフットボール』『洪水はわが魂に及び』にいたっては、ほとんど現実性を喪失(作者自身はもちろん喪失とは思っていないだろうが)してしまう。

このような、大江健三郎の初期作品から激しい現実への接近、およびそこから非現実、抽象化の世界へと方向を変える、『セヴンティーン』は一つの頂点をなす作品なのである。

『セヴンティーン』の主人公は、十七歳になったばかりの、自瀆癖じじくを持つ、コンプレックスの固まりのような少年である。

少年は自分の体格の貧弱さを恥じ、容貌のみにくさを恥じ、顔色の悪さを、「自瀆常習者の顔の色だ」と自嘲し、「殺してやりたい、機関銃でどいつもこいつも、みな殺しにしてやりたい」と呟く。家族ともうまくゆかず、自衛隊の病院の看護婦をしている姉に、少年のもつ観念的、気分的な左翼政治意識を批判され、言いまかされ、逆上して姉を傷つけても叱ることなく、「おまえは、もう、姉さんから大学の費用を受けとれないぞ、よく勉強して東

大に入るほかないねえ。官立大学なら月謝も安いし、奨学金をとれる率も高いからねえ」と言い放つ父親の冷たさに絶望し、物置につくった自分だけの部屋に閉じこもる。彼は暗闇のなかで古い脇差で暗殺のまねごとをはじめ、はじめて解放感をおぼえ、ギヤングという名の泥棒猫を、「野蠻で、悪の権化で、恩知らず恥知らずで、爆発的で、独り狼で、なにもものも信頼せず」「それでいてあいつはおれに尊敬の念をおこさせるほど堂々としており」美しいと考える。

少年もまた、ギヤングのような存在になりたいと思うが、「おれの頭のなかに豚の白子のような弱い脳があり、自意識があるから」それができない、そして眠るまえに死の恐怖におびえ、「おれが恐い死は、この短い生のあと、何億年も、おれがずっと無意識でゼロで耐えなければならぬ、ということだ」と考え、早く結婚し、美しくなってもやさしい妻に夜じゅう起きていて、「おれが眠ったまま死なないように見はつていてもらえたら」と願う。

この少年の恐怖がどこから来ているのかと言うと、それは、「おれは、この世界で独りぼっちだった、不安に怯えて、この世のなにもかもが疑わしく思え、充分には理解できず、なにひとつ自分の手につかめるものという気がしないのを感じている。おれにはこの世界が他人のも



ので、自分にはなにひとつ自由にできないと感じられる」からなのであり、「おれには結局なにひとつわかっていないのだ。おれは自分を一つの小枝にしてくれる永遠の風雪に耐える巨大な樫の木を見つめる能力がないのだ」と思うからなのだ。少年は自瀆をし、「恐怖の夜からせめてほんの短い間でものがれるためには自瀆をするほかにみちがないのだ」と考え、「おれは十七歳だ、はじめに悲しいセヴンティーンだ」「ああ、生きていくあいだいつもオメガスムだったらどんなに幸福だろう」と無気力に泣く。

この少年のコンプレックス、孤独感、恐怖感、我々

とは全く関係のない小説のなかだけの特殊なもの、と言つてしまふことはできないのではないだろうか。我々自身のかなかにも、これほど極端なかたちではないにしても、どこか通じるものが眠つてはいないか。多少とも意識的な、ものを考える青年であれば、誰でもこの少年のような意識を持たざるをえないのである。そしておそらくは大江健三郎は彼自身の感受性をつうじて（少年が自分の容貌のみにくさを自嘲するくだりが、あきらかに十七歳の大江健三郎を思わせる描写をしていることは、非常に興味ぶかい）一つのありうる実存のなかに深く降りて行つてゐる。自らの内部に深い堅穴を掘れば、それが深いところでは他とつながるとは、実にこのようなことをいふのではないか。この主人公の少年は、きわめて典型的な人間のありかたの一つのタイプなのである。

少年は翌朝姉の声を聞いて、大した傷でなかつたと知り、「おれはいつも取りこし苦勞をするのだ」「最悪の状態でばかり空想するのだ。それでいておれはなにか取りかえしのつかないことを仕出かしたことがない、おれは何事かをやる男じゃないのだ」「そして後悔したあげく、ほんと救われた気持ちになるような男なのだ」「おれがやることのできることにいったら他人どもの眼からのがれ、



かくれひそんで自瀆するだけだ」と思う。さらに学校の試験に遅れ、満足な答案もかけず、優等生のグループに劣等感を覚え、また女生徒もまじえて楽しく笑いさざめくグループにも、妙なプライドがあつて入ることができず、さらに午後からの体育のテストでは、今度は陸上競技の選手たちに「試験後の優等生たちがもつていたような態度をもつと誇張し」たものを感じて羨望してコンプレックスを刺戟される。そして少年は運動上の向うの女生徒たちを意識し、道から運動場をながめる見物人の眼を意識し、八百メートルを走りながら、「みんながおれの悲しく滑稽なよたよた走りを眺めていた、世界中の他人どもがみな嘲笑しながら、青ざめた頬に苦しみの涙をたらし唇を黄色にして内股でちよこちよこやつている汚な

らしいセヴンティーンを見つめていた、他人どもは、さっぱりとして乾燥していて雄々しく余裕綽々だった、おれは恥辱で眼もくらみ哀れっぽく、ぎこちなく怯え、ぶくぶく肥り、臭い汁をだしているにも腐ってしまいうさで、みじめな駄けっこをしていた」そして、走りおえたとき「苦笑いしながら教官がおれの背後を指さした、おれは微笑すまいと思いがら、ついあいまいに卑小な笑いをうかべてふりかえり、おれが小便をもらしてつくつた黒く長い道を発見」した。

少年は激しい屈辱のなかで、「おれはもうこの他人どもの現実世界に善意を見つけどそうとして縋りつくことは止めよう」と思う。外の世界に、「憎悪をもちし敵意をかきたて」ることを決意する。

このような感情も、我々は決して関わりのないものと考えすることはできない。確かにこの少年が自らの失態から逆に自己以外の世界に悪意を向ける過程はあまりに主観的で、感情的で、冷静な認識と判断をはなれたところのものである。しかし、このような人間の心の動きも決して架空の極端なものとしてではなく、充分実際に存在し得るものである。我々として、いつこの少年のようなところに落ちこんでも、何ら不思議はないのではないか。

それならばなぜ、今度は逆に我々は、この少年のようなコンプレックスや自意識の自縛におちいららず、一応は普通の社会生活が営めるのだろうか。ここに出てくる優等生たちは学力を誇り、陸上競技の選手たちは体力を誇る。冗談を言つて人を笑わせるだけの学生でさえ、自らの冗談が必ずそれなりの効果を引きおこし、人気を集めることを確信していて、それをよりどころとして自らを主張している。伊藤整の『鳴海仙吉』という小説のなかに、「ふん、あいつらのお題目は何だつていいんだ、と思うのだった。頭がよくて、実践力があつて、自己表示癖の強い青年がいる。その人間のエゴは何を手段にしても、何を主義にしても、自己を世間に押しつけて英雄意識を満足させたいわけだ」というところがあつて、非常に印象的だったのだが、エゴを発露する手段として誰もが必ずよりどころになるものを一つは持っている。そして我々はその〈何か〉のおかげで自らを主張したり、大きな声でものを言つたり、できるのではないだろうか。これは非常にイヤな考え方だ。我々が信じて疑わぬ自分自身のあるやうを、足元からつきくずすやうな考えだ。

そして少年もまた、ついにその〈何か〉を掴む。少年は右翼団体の街頭演説のサクラにやとわれて、右翼の指

導者の演説を聞く。そしてその怒鳴りたてるような声のなかに、「おれ自身が現実世界の他人どもに投げかける悪意と憎悪の言葉」を発見する。少年の心のうごきが見事に描かれている。

「その演説の悪意と憎悪の形容はすべておれ自身の内心の声であつた、おれの魂が叫んでいるのだ、そう感じて身震いし、それから力を全身にこめて、おれはその叫喚に聞きいり始めた」。「自分の弱い生命をまもるためにあいつらを殺しつくそう、それが正義だ、おれは立ちあがり拍手し喚声をおくつた、壇上の指導者はおれのヒステリック症状をおこした眼に暗闇の淵からあらわれる黄金の間として輝き煌めきながらうつつた、おれは拍手し喚声をおくりつづけた、それが正義だ、それが正義だ、酷いことをされ傷つけられた弱い魂のための、それが正義だ、」。「そうだ、おれは《右》だ」「おれは他人どもに見つめられながらどきまぎもせず赤面もしない新しい自分を感じた」少年は周囲の他人の非難の眼をはねかえし、「《右》がどうした、おい、おれたち《右》がどうしたというんだ、淫売ども、」と怒鳴り、右翼団体へ迎え入れられる。はじめて《何か》を得た少年はすべてのコンプレックスや恐怖、自意識から解放され、《右》少年として自らを獲得する。少年の失態のすべてが《右》の名のもとに解消

され、少年は家族とも和解し、異性への恐怖から解放され、ますます自らを《右》少年として完成させてゆく。

先にも述べたようにこの小説は現実の事件に題材を得たため、大江健三郎は右翼団体から脅迫をうけ、この「セヴンティーン」第二部「政治少年死す」は現在もまだ活字にされていない。それゆえこの小説はその政治的側面が大きくとらえられがちなのだが、この小説の主題は、少年が《右》少年にならなければ成立しない、ということとは必ずしもないのではないか。《右》であつても、《左》であつても、また政治でなく他の学問やスポーツであっても良いのではないだろうか。およそ何ごとかものごとをなそうとしてゐる人間、何ごとかをなしつつある人間に向かつて、この小説は、あなたはどうか、と問いかけてくる。あなたはここに書いてあるこの少年と、一体どう違ふのか、と問いかけてくる。この小説は、単に政治的な意味以外に、我々の日常性に不安をもたらす、確かに極端ではあるが、しかし恐ろしい小説なのである。

(えさき あきら・文学部二回生)

## 『剥奪された関係性』 その外延としての映画論』

黒 木 貞 雄

まず次のような問いをもって始めよう。

—— 映画は擬似体験なのか？

映画がマス・メディアとしてブルジョアジーによる大衆操作の一環に、戦略的に組み込まれている以上、奴ら敵権力の映画を通じての攻撃というものを、ぼくらは看破せねばなるまい。そのとき映画は、人民を擬似体験で満たすための手段として利用されてくる。もちろん、そこでの擬似体験とは体制の「合法」的暴力の容認や侵略、抑圧の正当化とその鼓舞を目的としたものであり、労働から疎外されたプロレタリアートに夢・空想を与えることによつて、意識の上で彼らを支配者、差別者の側へ

と引き寄せ、彼らの階級的に持つべき怒りと告発者としての立場に加害者の感性を塗りたくり、それを欲求不満へと平坦化し、ストレス解消の矮少な構図によつて規定してしまふ、という内容を持った擬似体験だ。

映画を見ることは紛れもなく実践であるのだが、支配階級はその実践の場を、人民をして自らに隷属せしめるための擬似体験注入の場として固定化させるのだ。

大衆の意識が操作されるとき、観客の中に蓄積されていく擬似体験が究極的に支配・被支配の関係を肯定させていくものとしてある以上、個々の映画を見て受ける印象は、権力が自らの利益をはかるといふ理由から、常に

## 生協新聞 編集委員 募集!!



- 新聞のわりつけに興味のある方
  - 文化・思想運動に興味のある方
- ▽問い合わせ△

生協本部3F 組織部まで

☎(〇六)三八八一—二二

(内線 四八二二)

階級闘争の具体的状況によって規定された、あらかじめ仕組まれていた印象であるはずだ。

そして、ここにさらに重要な問題点が隠れている。その印象が、作為的にある地点まで同一方向へ向けられるべく、個々の映画が生み出されるならば、鑑賞者が画像から印象を引き出していくプロセスそのものさえが、あらかじめ規定されていなければならぬことになる。事実、ぼくらの映画を批評していく目そのものまでもが、今まで規定されてきたのだ。

具体的には、(1)素朴実在論的に前提とされ、制度化されたプロットやストーリーの、素材としての扱われ方における偏重性、(2)その結果としての、劇映画にしみつい

てしまった原理的に前近代的演劇に酷似する性質。(ブレヒトが演劇の劇的形式と叙事的形式について触れた「対照法」を想起せよ。)(3)さらにはそれらの裏返しとして生まれた酷薄な「映像」賛美↓「視覚芸術としての映画」論。(基本的には正しくもあるこの見解も、多様な解釈を拒む皮相な風景絵ハガキの画像までもを礼賛していくような批評レベルでは殆ど価値にはならない。)

印象が誰にとっても均一なものではない、即ち鑑賞者の想像力に自由に働きかけない画像は、イメージが浅薄で不鮮明で、特殊性を持たぬのつべりとした画像ではないのだ。断っておくが、画像のフォーカスとイメージの峻烈さとはまるで関係がない。両者の短絡的結合は、



歴史的に塗りたくられてきた俗流自然主義の毒性をその接着剤としている。

(だが、このような「既成」批評の不毛性に、映画自体が純粹に対応しているということはない。部分的には、お粗末な批評家たちが賛えた映画でも評者たちの視力を超えた地平に位置する映画はいくらでもある。たとえば、最近では「ツイゴイネル・ワイゼン」なる快作も登場している。しかし、この作も依然として、商品としての十分条件である「明快さ」の呪縛を引きずっていることは

変わらない。その「明快さ」の負性は、画像のSP盤が回転して初めて聞こえるタイトル曲が象徴している。

「昭和残侠传」の愛すべき名シーン、高倉健と池部良の殴り込みへの道行きるとき、あのどこからともなく流れてくる「唐獅子牡丹」と比較するがよい。作品に対しては取りあえず何をしようが構わないという作家の支配力を予測させつつ、それでも蓄音器の画像によらねば始まらぬ「ツイゴイネル・ワイゼン」とは、音声のストイシズムとでも呼ぶほかないだろう。)

従って、観客が映画とつながる回路自体が、以上のような内容で構造的に一元化されることは、権力による大衆操作における道具として機能する宿命を負う映画が、外的な強制を甘んじて受けてきた歴史の結果であった。

さらに悪いことには、本来的に法則も原則も有せぬ映画という水に、そのような宿命が強いってきた容器が、愚かにも映画の内的性質として度々理解されてしまうこともあるのだ。

ぼくはその容器の質について全否定するつもりはない。それもひとつの魅力ある映画の変体だ、と思う。

しかし、これが映画と観客の関係を一面化し、平坦化し、固定化していくとき、あくまでも擬似体験の生産に規定された自立不能の存在としての映画が、不可視的次元に、



排他的特質をムキ出しにした絶対者として存立する、という逆説が成り立ってしまうのだ。

このような映画の屈辱的歴史を分析し、これからの映画の救済者としての自覚と責任を改めて確認しながら、「映画は擬似体験か？」という再度の問いかけに、我々はさらなる大声でノーと叫ばねばならない。

映画体験を真に人民の実践として克ち取るための有効な切り口を穿つ準備として、次のような映画論が提起できる。かつてまともには取り上げられなかった映画の創作過程に注目し、それをドラマ(トゥルギー)として抽出することによって、逆に、作家の営為を作品にフィードバックさせていく、そのような方法論を核となす映画論である。出来上がった映画を見ることを、「擬似体験」とは無縁の積極的直接的な実践にまで転化させる為には、作家の対象との関わり方、さらにはそれを内包したところでの映画との営為を、人民の能動的な実践として評価し、肯定する観点が必要なのだ。

この映画論の視角は、作家と対象との緊張関係を質的に深化させ、映画の発展を可能にするのだ。そして、ぼくらが主体的に見てきたつもりで、実は見されてきたに過ぎなかったという映画の陥穽を、加害者の感性もろともに拡大再生産してきた元凶こそが、これら作家主体



と対象との緊張した関係性の欠落だったのだ、とも言えない。

このような商業映画の欠陥が明らかになったのは、実に8ミリや16ミリによる自主制作映画の大衆化の過程であった。ぼく自身、一人の8ミリ映画作家として発言する。かつて不可知のものとしてしかなかった「作家性」を我が物にする契機を得た者たちは、スナップ写真的ホームムービーでさえ作家主体として立ち合う人間を必要とする、という単純な事実につき、ドキュメンタリーと虚構という二分法に基く両極構造論の神話を崩し去ってしまった。映画が捕える対象というものは、作家主体

が全責任を引きずりつつ対峙せねばならぬ対象であり、その緊張した関係性こそが、映画の劇性が動的に展開される起点にほかならないのだ。

8ミリカメラによって、大衆の作家への転位の契機は潜在的に増大された。また自主製作映画による関係性の回復は、それまでの映画批評を本質的に動揺させ、観手の感受性がかつての虚妄の直線的統制から解放させつつある。

「自覚した」作家によって創造された、未だ相対的に数少ない映画のうちから、ここではただ一つ、ジョン・メカスの「営倉」(66年)を挙げる。詳しい紹介をする余裕はないが、ケネス・ブラウンの同名の芝居を知ったメカスが、何としてもカメラを通してこの芝居に立ち会いたいと思いたち、舞台の上に撮影者として入り込み撮った記録が、この映画「営倉」だ。後にこのメカスは「リトアニアへの旅の追憶」(72年)を完成させるのだが、そこでは生き別れになっていた母との再会の場にさえ、カメラアイを通してしか立ち得なかった彼の姿が、撮り上がったフィルムから逆照射されている。そこまでカメラを信じきる彼の方法意識と表現への異常なまでのこだわりが、即自的に映画の内実として「営倉」や「リトアニア……」に脈打っているのだ。メカスがあり、芝居があり、両者



の関係が「営倉」を生んだ。逆に、彼は映画を内的に有していなければ、この芝居を見ることもできなかった、というのである。告発者の怒りに満ちたこの芝居を。

「営倉」の指し示す意味はふたつある。

(1)映画にこだわることは、作家の社会への能動的参加を、自己の告発者への成長を何ら防げるものではない。

むしろ、メカスは映画を媒介となすことによって、理念的には、物質的矛盾を個別の状況に引きずり込みその特殊性、具体性を突きつめるうちに、己れの異議申し立てをより普遍化することができただろう。

そして(1)に立脚すれば次のような思考が頭をかすめる。  
「プロパガンダ映画」は一般的に欠如しがちな「関係性」を回復してこそ、より能効な伝達の武器となろうではないか。

だが書いたすぐそのあとで、この言葉の速断と無思量が顕在化してくるのに気づく。

(2)メカスはリポーター＝撮影者＝作家としての自己を強く意識していたとは言え、「社会」が容認する「合法的」暴力に怒り狂う程度に敏感な問題意識をそれ以前に持っていた。支配者への告発は「関係性」の中にア・プリオリ



に存する性質のものではない。映画にのみ関わる過程では、突破しようのない限界である。

現実にはぼくらの生活空間が、非和解的な階級闘争の中にある以上、学生としてあるぼくらは、世界労働者階級の蜂起の正当性と必然性を確認し、闘いを勝利へと推し進める責務に対し、傍観者であることは許されまい。

「関係性」のみに、自己目的的に注目したところで、青年の反逆は演繹されないのだ。何故ならばぼくらの反逆を物質的に不可避にしていく(映画)外的諸条件に規定された存在として自己を見つめ直すことが、「関係性」映画論の脆弱な側面として不足しているのだから。

しかも今回ぼくの述べた映画の「解放」というものは、「ツイゴイネル・ワイゼン」でも述べたように、多分にカック付きな内容でありながらも、体制のワク内に認められるものとなりつつある。多少であれ体制の許容ワクは広がっている。しかしそれは体制の強化ではあっても、譲歩では断じてない。即時的に敵権力への攻撃とならない映画、それはもしかすると表現の領域にあることからの宿命なのだ、と弁解もできよう。だがこの時代、侵略とファシズムへの準備が着々となされている現在、ぼくらにとって必要なのは、たとえ今不明瞭な姿態しか見せぬ攻防環であれ、それを先取的に撃つていく方法の発見な

のだ。

実は8ミリ自主映画が突出した活力を体现しているか  
というと、これも違うのだ。体制の包括力は巨大化し、  
一方で8ミリ作家群が、価値なき35ミリ商業映画の縮小  
再生産の徒弟に成り下がってしまふとき、蓮美重彦の不  
気味な呟きが、ぼくの硬直した意識に呪文のようにはり  
ついてくる。

「映画は映画を模倣する。」

その始点の「映画」とは、ついに問われずじまいなのだ。  
J・L・ゴダールの「東風」(69)中の、「解放の映画はマル  
クス・レーニン主義思想の用語をもつてしか語れない。」  
という声の悲痛なるさわやかさ、これを超える批評映画  
の出現はまだ遠いことなのだろうか。

しかし、この関大では、文化サークルの情況との対し  
方の透視図的構造は変質し、実は深く進行しているはず  
の大学再編、サークル再編の攻撃に対しても、明確な争  
点を掴み切れない。にもかかわらず現実には、単なる映画  
愛好家サロンであるというだけで、当局の学内御用サー  
クルと質的に同一なものとなつてしまふ、それ程までに  
強力な再編が、国家レベルの感性矯正の一定の「勝利」  
を前提としてなされていく只中にあるのだ。ぼくらが越  
冬していく場合は、いよいよ政治しかないのだろうか。

映画にこだわれるすべての者たちよ。ぼくらの「最後  
の牙城を築くための「土掘り機」として、あらためて「関  
係性」を見つめ直すまなざしを取り戻したまえ」さらに  
根元にまで遡らねば掴み切れぬ「政治」が、この映画論  
に投げつける不在証明からも目をそらすことなしに。

(くろき さだお・文学部二回生)

## 日本中国

### ことばの来往ゆきき その5

芝田稔

「機関銃八挺ノ」もあるとは？

最初から、ちと物騒なことばが飛び出して、恐縮であるが、このことばのおかげで、村人の生命財産が守りぬかれたという、めでたい話。

「機関銃八挺ノ早くノ敵が来たぞー」

爺さんは土堀越しに、隣家に向って大声で急を告げた。

ちようどその時、この村の様子を探るために、張家の門前でうろついていた汪精衛軍〔注〕の密偵が二人、不意の叫び声を耳にして仰天したらしい。

この二人は何やら耳打ちをしていたが、急にきびすを

返し、すたすたと元来た道を引き返して、遙か彼方の林の奥へ、その姿を消して行った。

こんなことがあつてから、一九四五年八月日中戦争が終るまで、この村（江蘇省泰興県の張家河＝揚州の東方六十料、長江の北岸）には、汪精衛軍の「掃討作戦」が行なわれたことはなかつたという。

これは、この地方の方言音が幸わいして、あの密偵たちが、爺さんが叫んだことばの意味を、とりちがえたからであつた。というのは、爺さんが力ぎり叫んだあの「機関銃八挺ノ」とは、実は隣家の若者「機械工の八っちゃんノ」のことだつたのだ。

爺さんは隣家の「八つちゃん」に急を知らせた。

「八子機匠」パーツ・チージアン（機械工の八つちゃん）……」

ところが、このことばが密偵たちには……

「八枝機鎗」パージ・チーチアン（機関銃八挺）と聞えたのである。

それもそのはず、この泰興一帯では「子」と「枝」、「匠」と「鎗」が全く同音なのだそうである。

なお、この話には、もう少し説明が必要である。

このエピソードに登場する人物は、張登栄という実在の農民であり、もう七十才に近い。だが、村人たちはいまでもこの人を「機械工の八つちゃん」と呼んでいるのである。それはなぜか？

中国には昔から面白い習慣があった。例えば、魯迅の小説『風波』に、こんなくだりがある。

この村の習慣は少し変っていて、婦人が子供を産むと、よくハカリで目方を量り、その斤数を子供の呼ぶ名としたものである。

ここに登場した張さんも、生れた時の目方が「八斤」もあつたことから、父母はこの子を「八小」パーシアオと呼ぶことにした。

ところで、近隣の人たちは、他人さまの子供を「八小」

ともいえず、いつの間にか「八子」パーツと呼ぶようになった。そして彼が成長して紡績工場で働き、一人前の機械工になるに及んで、村人たちは彼を「八子機匠」と呼ぶようになったというのである。

広い中国のことである。土地の習慣や方言音のちがいで、思わぬことがあるものだ。

〔注：汪精衛軍とは、日中戦争（一九三七―四五）中に、蒋介石委員長に反対した汪精衛が三八年十二月重慶を脱出して抗戦停止・和平建国を提唱し、後、日本軍部と結んで組織した「和平建国軍」のことをいう。汪は四〇年四月南京に「和平建国」臨時政府をつくり、同年十一月主席。四五年日本にて病死した〕

（この稿『民間文学』第五十二期参照）

### 「八小」に「は」考

「京の茶漬」ということばがある。これは「河内」のできあい」と同じ意味の挨拶ことばだが、訪問先で主人から「茶漬どすが……」とか「できあいどっけど……」などと食事をもてなすゼスチュアでもされると、ひどく当惑するものの、どこかに親しみを感じることばである。だがこれほど無責任な挨拶もほかにはない。それを真に受け

## 書評編集委員 募集!!



て:「じゃ、おことばにあまえまして」と、上げた腰をもう一度下そうものなら、あなたは非常識な、もの知らず”になってしまうのである。

中国にもこれに似た挨拶ことばがある。

「ニー・チー・ファン・ラー||你吃飯了?」

「チークオ・ラー||吃過了?」

「チー・ファン・ラー・マ||吃飯了么?」

「チーラ・メイヨウ||吃了没有?」

いずれも「(ご)はんは)おすみですか?」という意味であるが、京大阪の挨拶とは余程ニュアンスがちがうのである。

さて、知人の宅を訪問したとしよう。迎えに出て来る

主人の口から最初に出るのが、この挨拶であった。京大阪でのように、帰えりぎわに出てくる挨拶ではない。だから……

「ピエンクオ・ラー||偏過了(いますましたばかりです)」

とすなおに出てくるきまり文句がある。

前回述べた「急就篇」には、このように生活と密着した挨拶用語が、対話形式で順序立てて編集されていたものである。

北京をはじめ北方では、ごく親しい間柄になると、河内の”できあい”そっくりの「ジアチャン・ピエンファン||家常便飯」が飛び出してくるのであった。

●文化・思想運動に興味のある方

●編集作業をやりたい方

随時ガイダンスをやりまます。

▽問い合わせ△

生協本部3F 組織部内 書評編集  
委員会まで。

だが、いずれにしても「おすみですか？」と聞いているのであって、京大阪のように「いかがですか？」と無理に勧めることはしない。「おすみですか」と問われているのに、わざとこれに逆らって……

「いやまだなんですよ」ハイ・メイ・チー・ファン  
・ナ（還沒吃飯哪）

とは、いいにくいのである。だから、この挨拶ことばが親しいもの同士の「こんにちは」というごく一般的な挨拶用語になったのではなからうか。

## 「ハオ」好」の功用

挨拶ことばを述べたついでに、よく使われる「ハオ」好（よい、よろしい、立派、元気……）の功用をひとつ。

「ニー・ハオ」你好（こんにちは、お元気ですか、ごきげんさん……）」

ということばは、今日の挨拶用語のうち、これほど多くまた広く使われていることばはない。

この挨拶ことばは、中国ではいまや初対面同士であれ知人親友間であれ、また職員や年輩の上下を問わず、さらには口頭語・書面語の別なく、広範囲に應用されている。そればかりではない。学术交流などで本学を訪問さ

れる初対面の中国の学者とでも、これで結構間に合うのである。

この「ハオ」好」ということばの応用の広さは上述のとおりであるが、誰だつて「ハオ」といわれて不機嫌になるものはいない。お互いに「ハオ」「ハオ」といつて暮らすことができれば、それこそ天下泰平である。

さて、面映いことではあるが「ハオ」のおかげで、元宵のだんご〔注〕にありついた話。

それは旅先きで迎えた旧の小正月、中国では「灯節」ドンジエ」の夜のこと。河北省の一港町、その場末の小さな食堂でのことである。

北京の街に比べると、うす暗い片田舎の街であるが、「灯節」の風俗はかたく守られており、粋を競っているかのよう。京劇に出てくる歴史人物の絵画や詩句を墨書した灯笼が意匠をこらしてずらり商家の軒を飾る。これを觀賞して回るのが「灯節」の楽しみであった。

その一軒の食堂がかかげた灯笼に、こんな「打油詩」（平仄韵律にかかわらず通俗で談話に富む旧体詩）が一首墨書してあった。

一字上有牛、立日在心頭、

西下有女子、女人旁有子。

そして、その後に「打四個字」（四字で当ててみよ）とあ





り、さらにその添え書がふるっているのだ。

これを解いた方は大声でその四字を叫んでお入り下さい。当店特製の元宵一碗無料にて進上致します。

この詩のナゾを解くには、そんなに時間がかからなかつた。一句一句、字句のとおり、手の平に字を書いてみる。

「生意要好 〓 シオンイー・ヤオ・ハオ (商売繁昌と  
いう意味)」

ではないか。なるほど、縁起をかつぐ商人が好むことばである。日本でも、いや、ここ千里山の学生相手のうど  
ん店にも、これに似た短冊があつた。曰く…「春夏冬五

合」と。

そこで「旅の恥は」ではないが、勇を鼓して……

「シオンイー・ヤオ・ハオ」

大声で、しかも最後の「ハオ」に力を入れて、店に入った。客の視線を一身に浴びて一瞬たじろいだだが、番頭や丁稚の笑顔で迎える「ハオ」「ハオ」のことばに、こちらもつい嬉しくなった。そして、場末の小食堂とはいえひとかどの上客扱いを受け、熱熱の特製「ユアンシアオ」元宵を振舞われたのであつた。舌に染みいるようなあの味は、四十数年後のいまも忘れられないのである。

〔注：旧曆一月十五日は「上元節」または「元宵節」という伝統の紋日。この夜戸に趣向をこらした灯笼を軒にかかげ「観灯」といつて人びとは灯笼を觀賞して回る風習がある。故に「灯節」ともいい、古く唐代に始まった風俗であるとされている。昔は十三日の「試灯」から十八日の「落灯」まで、商家ではドラや太鼓で賑やかに過した。また端午のちまき、中秋の「月餅」に対し、灯節には「元宵」という餡入りだんごが登場、これをゆでたり、油で揚げたりして食べる風習がある。〕

(しばた みのる・中国文学科教授)

## 北京で生活して(四)

鳥 井 克 之

### 北 京 大 学

〔理科系学部〕その二

◎地球物理学部：地球物理学、大気物理学、気象学、宇宙物理学、天体物理学の五学科があり、修業年限はいずれも四年間である。色盲、色弱の者は専攻できない。教養の必修科目には政治理論学習、外国語、体育などがあり、さらに各学科ごとに基礎科目と専門科目が設けられている。年度によっては専攻生を募集しない学科がある。

地球物理学科：地球物理学は固体物理を研究する応用

科学の一つである。それは地球の形成と変化、地球内部の構造とその物理的性質、各種の地球物理の場の成因と性質と応用、地震の成因とその予報等の諸問題を研究し解決するものであり、これらの問題は理論面において重要な意義をもつだけでなく、地下資源開発、地震災害の予防、国防建設の面においても重要な意義をもつものである。本学科の基礎および専門科目には、高等物理学、一般物理学、理論物理学、地球物理学、地質学、弾性力学、破壊力学、さらには地震学、重力学、地磁学、地電学、専門実験などの科目がある。卒業生は地球物理に関する科学研究、教育その他の実務に従事することもでき



スケート場にかわった末名湖

れば、物理方面の研究、教育にたずさわることでもある。大気物理学科：大気物理学は大気中の物理的現象と物理的プロセスを研究する科学であり、その中には気象学、天文学、気候学、大気物理学、大気化学などのいくつかの分野に分かれる。それは大気の直接的探査やリモート・センサスによる観測による大気の運動、熱力学プロセス、光・電気・音波の伝播、雲・霧の降雨過程、人工の影響による天気、大気中の汚染物質の拡散法則、環境保護などを研究し、経済建設と国防建設に寄与するものである。在学中に学習する主な専門科目としては、高等数学、数学的物理学方法、一般物理学、理論物理学、無線学、

大気物理学、大気探査などがある。卒業生は科学研究機関、気象部門、環境保護分野、大学・中等専門学校における大気物理学方面の科学技術あるいは教育活動の各方面で活躍している。

気象学科：気象学は近代数学と物理学を応用して大気の運動法則を研究し、正確な天気予報を行なうための学問である。天気予報は国民経済と国防建設に密接な関係があり、台風、暴風雨、寒波、ひざりなどによる災害をもたらす天気は農工業生産や軍事活動に重大な損失をもたらす。このため、天気予報はますます人びとから重視されている。中央気象台、各省、直轄市、自治区の地区気象台および各県の気象センターは天気の変化を厳密に監視して、様々な天気予報を随時に出している。技術の進歩によって、天気予報の的中率はしだいに高まり、予報範囲もしだいに拡大された。現在では、各省、直轄市の気象台はすべて宇宙気象衛星からのデータを受信できる装置を備え、いくつかの大きな気象台では大型コンピュータを配備した。このため、天気予報の活動には高度の理論的基礎をもち、専門技術に精通した隊列が求められている。

気候学の研究は気象学のもう一つの重要な課題である。気候の変化と人類の活動が気象に与えた影響は目下のと

ころ国際的にも大いに重視されている問題である。大型の高速コンピュータを用いて気候のシミュレーションを行ない、個別的な物理的要因の変化がもたらした気候の変化を研究することがすでに重要な研究の方向となっている。この外に、気候は地球資源の開発とエネルギー源の利用などとも密接な関係がある。四年間の在学中、二年半は高等数学、物理学、理論力学、流体力学などの基礎科目を学習し、約一年間は動態気象学、天文学などの基礎科目および数値天気予報、中長期天気予報、数理統計天気予報、大気動力学、大気環流、気候変化などのコースを選修する。卒業生は気象科学方面の研究、教育、実務活動などに従事している。

宇宙物理学科：宇宙物理学は太陽と地球との空間、星と星との空間に発生したさまざまな物理的現象を研究する学問である。最近の三十年間に、エレクトロニクスと宇宙開発技術の進展により、宇宙物理学は急速に成長した学際的な科学である。本学科では太陽と地球との空間の物理、即ち太陽アラシと磁層物理学、電離層物理と電波の伝播、高層大気物理学の科学研究と教学に重点を置いている。科目としては一般物理学、高等数学、数学的物理解方法、エレクトロニクス、理論力学、統計物理学などの基礎科目と稀薄気体動態力学、プラズマ動態力学、電

離層物理と電波の伝播、太陽と磁層物理、高層大気構造とその探査などの専門科目がある。卒業生は宇宙開発技術、国防、郵便、電信各部門および宇宙科学、電波伝播、天体物理、大気物理などの研究および教育活動に従事している。

天体物理学科：天体物理学は天文学の一分野である。それは天体の物理的性質、化学的組成、運動状態、発展変化の法則を研究する学問である。果てしなく広がる宇宙というこの空間と時間内に発生する一切の天体物理の現象と天体の物理的プロセスはともに天体物理学の研究対象である。専攻生の科目には、高等数学、一般物理学、



北京大学南正門（入ってすぐ右手には  
外国人留学生の寄宿舎が並ぶ）



北京大学の西正門

各部門理論物理学、数学的物理方法論、流体力学、磁気流体力学、プラズマ現象論、基礎天文学、天体物理学方法論、ラヂオ・アストロノミー、理論天体物理学などがある。卒業生は各天文台で天体物理学方面の研究に従事するか、または大学、中等専門学校で天体物理学あるいは物理学の教学と研究に従事している。

◎無線電子工学部：電子工学は現代で発展が最も急速で応用範囲が最も広い科学技術であり、国民経済、国防お

よび科学技術のあらゆる領域にまで浸透している。現代の通信衛星、マイク波による通信、レーダー、ミサイル、テレビ技術、リモート・センサ、遠隔測量、コンピューター技術などはいずれも電子工学の重要な応用分野である。本学部の学生は政治理論学習、外国語、体育などの教養科目以外に、最初の三年間に高等数学、一般物理学、数値解析法、理論力学、電気力学、統計物理学、量子力学、線形代数学、トランジスタ回路、パルス・カウンタ回路、コンピューター原理とプログラミングなどを履修し、最後の一年間で各専門学科の専門科目と一定の科学研究の実験演習などを行なう。卒業生は主として電子工学関係の研究、教育、生産などの分野で活躍している。なお本学部には物理学、無線電信物理学、音響学の三学科があり、修業年限はいずれも四年間、色盲、色弱者は本学部を受験できない。

物理学科：北京大学では二つの学部（無線電子工学部と物理学部）に物理学科が設けられている。本学部の物理学科には電子物理学とスペクトル学・量子電子学の二専攻がある。

電子物理学専攻：電子物理学は主として電子と物質および電子と電磁場の相互作用における物理的法則を研究し、エレクトロン・エネルギーをより効率的に四つの近

代化に貢献させることである。電子顕微鏡やエレクトロン・エネルギー測定スコープなどの各種の電子真空機器や各種の真空精密電子計器などの設備において、それらの物理問題や物理法則が本専攻の研究対象である。電子物理学には電子発信（エレクトロンが固体から表出するデータについて討論する）と陰極電子工学、電子光学、マイクロ波電子工学、真空物理学および表層物理学などの内容が包括される。



第35楼寄宿舎

スペクトル学・量子電子工学専攻：スペクトル学は物質と電磁放射の場における共振相互作用を研究する科学である。それは物質の電磁波に対する反応を通して、物質の超微視的構造とその内部運動を研究し、物質の構造を探索し分析する重要な手段となっている。とりわけ、核磁波共振、順磁波共振の研究は物理化学、生物学の分野で広範囲にわたって応用されている。

量子電子工学とは物質の放射の場における反作用を利用して、無線電信や光学通信記号を発生、拡大させるのに用い、それによって、マイクロ波送信装置、原子時計、レーザー光線機器などの新しい装置や機器を製造するという、きわ立った成果を挙げている科学である。専門課程でスペクトル学、レーザー原理、量子電子工学基礎理論、量子スペクトラム原理などについて学習し、この方面の研究者を養成している。

無線電信物理学科：本学科では無線電信による通信伝達とその処理に関する最も一般的な物理学法則を研究する。本学科では通信理論、情報伝達処理理論、リモート・センサー、レーザー信号処理理論とその技術を備えた人材を養成することに力を注いでおり、専門課程では通信原理、情報伝達とその処理、データ分析とそのネット・ワーク化、データ信号の処理などについて学習する。

## 次号 57 号 原稿募集!!



音響学科：本学科には水中音響学選修コースが設けられている。水中音響学は近代音響学の重要な一部門であり、物理学と無線電子工学の理論と技術を基礎として、海水中における音波の発生と受信の問題および伝播の法則性を研究する。水中音響学による設備と技術は航路誘導、魚群探知、海上探査、潜水物体の探査と予報などの国民経済と国防建設という重要な課題に対して重要な役割をになつてゐる。専攻生は本学部の基礎課程以外に、さらに水中音響物理学、連続媒体力学、変換器などの専門課程の授業を受ける。卒業生は水中音響物理学の研究、水中音響学による設備試作などの方面で活躍する人材を養成している。

◎化学部：化学は原子とか分子のレベルで物質の構造、性質、変化を研究する学問である。国民経済の各部門や科学技術の各領域から人民の衣食住にいたるまで、すべて化学と密接なつながりをもたないものはない。今日の生産の急速な発展、科学技術のこの上もない飛躍的発達には、化学に対してより高度の要求とより多くの課題を提起した。宇宙を飛行する宇宙船やスペース・シャトル、エレクトロニクスによる最先端技術から地下資源の開発とその精製およびその総合利用にいたるまで、また、針麻酔、抗ガンのメカニズムから農作物の増産、病虫害の防除から原子エネルギーの開発と利用、生命の神秘の探求にいたるまで、どの一つを取ってみても化学が新しい

テーマ●今日の韓国情勢。例えば、在日朝鮮

作家の書評など。

字数制限なし。

締切り●七月三十一日

あて先●〒565 吹田市千里山東三二一〇一

関西大学生協同組合

書評編集委員会

材料や生産品を合成することを要求しないものはない。このため、社会主義革命とその建設は我われに化学方面の研究、教育、実践活動に従事する人材を大量に養成することを求めている。

この学部には化学科が設けられ、修業年限は四年間である。色盲、色弱、鼻炎および化学薬品に対してアレルギー症のあるものは本学部を受験することはできない。学生は政治理論学習、外国語、体育の科目以外に、最初の二、三年は主として一般・無機化学、分析化学、有機化学、物理化学、構造化学、化学工学などの基礎科目を学習し、後の一年ないし一年半はそれぞれ以下の八専攻のコースに分かれて勉強することになっている。

無機化学専攻：現代科学技術の飛躍的な発展は各種の特殊な性能をもった無機質材料、たとえば人工モノクリスタル、発光材料、磁性材料、スーパー伝導体、特殊陶磁器などの特定の構造と純度をもった材質が要求されている。中国は天然資源がかなり豊富で、これらの宝の資源を多く、速く、りっぱに、むだなく開発、利用して、中国独自の無機化学とその合成化学産業を発展させるために、我われが大量の理論と技術活動を行なうことを国家が要求している。

分析化学専攻：化学の領域において、物質の人工合成

にしろ、反応メカニズムの確立にしろ、さらには一連のその理論形成にしろ、いづれもすべて物質の組成分析の研究と切り離すことはできない。分析化学は我われが物質およびその変化の法則性を認識する眼であり、各科学技術が依拠しなければならぬ科学の一分科である。現代化学技術の発展は分析化学に対して急速、精確、微量化、自動化という要求を提起し、大量の分析化学活動に対して研究をおしすすめることを要求している。



北京市近郊にある古塔を模して作られた北京大学供水塔



有機化学専攻：有機化学は有機物の分離、構造測定、合成、性能を研究するものであり、すでに多方面において成果を挙げ、実用に供され、我われに各種の重要な薬品、農薬、染料、燃料、感光物質を提供している。ところで、有機構造理論と生理活性物質の研究は、生命の神秘を探索するための重要な糸口とデータも提供している。

物理化学専攻：エネルギー源の開発とその合理的利用、新しい材料の設計と合成、あるいは生物の変遷プロセスとそのシミュレーションにせよ、いずれも物質の構造と性質を研究しなければならず、それらの相互間の影響および転化の特異な、または一般的な法則を研究しなければならない。これが物理化学の任務である。物理化学は化学研究における多くの基本的な理論と実際的な問題にまで及び、化学熱力学、化学動態力学、量子化学、統計化学、電気化学、光化学、表層化学、コロイド化学などに関する課題を研究している。

触媒化学専攻：一定の条件のもとで、ある化学変化を多く速く、りっぱに無駄なく実現させるために、必要とされる製品と有効な手段を獲得するために、触媒というこの独立した学問が必要となった。今日では人びとは実践を通して、各種の触媒体を有効的に製作しているが、理論面での研究成果はまだかなり立ち遅れている。その

ため、さらに多くの深く掘り下げた研究が要求される。

高分子化学専攻：我われは生活と仕事の中において、しばしば天然高分子および合成高分子の物質と接触している。二十世紀になると、合成高分子材料は猛裂な発展を遂げた。ある合成材料のごときはその強度が金属をしのぎ、また、あるものは腐蝕と高温に耐えることができ、また、あるものは人工器官として人体に移植することができる。これらの化合物の合成、構造、性能を研究することが高分子化学の任務である。

コロイド化学専攻：石墨を水中に入れてもいかなる反応も示さない。しかし、コロイド体で摩擦されると、こすられて渾然一体としたコロイド状になり、テレビのブラウン管の重要な原料となる。油は水に溶けないが、セッケンを加えると『乳化』する。これがつまりセッケンが油による汚れを取り去る要因なのである。この二つの現象は、物質が分散してある程度に達すると、物質間の界面張力の変化が物質の性質の変化を引き起こすことになりうることを物語っている。この究明がコロイド化学に課せられた問題である。今日では、大は石油開発とその精製、触媒機構、環境汚染、生命のプロセスから、小は我われの日常の衣食住の生活にいたるまで、すべて解決しなければならぬ大量のコロイド化学の問題をかか

えている。このため、コロイド化学は重要な科学研究の領域である。

アイソトープ化学専攻：現代の科学技術はすでに元素を研究対象とするだけでは満足できなくなっており、さらに一歩進めて同一元素の各種の同位素を研究しなければならなくなっている。核熱反応のコントロールを含む原子エネルギーの開発と利用は、水素、リチウム、ウランニウムなどの重要な同位素の有効的な分離を求めている。また、原子核の化学的効力発生については物質に對するより深い理解をもたらし、さらに農業、工業、医学、生物学の各分野におけるアイソトープの広範な応用はアイソトープ化学というこの新興学問をより急速に形成することになった。それは放射線化学が放射性同位素をもつばら研究するのとは異なり、主として安定した同位素の分布、分析、分離、化学的効力発生とその応用を研究するものである。

◎心理学部：本学部には心理学科が設けられており、修業年限は四年間で、色盲、色弱の者は本学部を受験することができない。心理学は人間の頭脳という最も複雑な物質が客観的現実を反映する活動の法則性を研究する科学である。具体的に言えば、それは感覚、記憶、思考などの心理過程の活動法則と能力、気質、性格などの個性

的な心理特徴の形成法則および意識の発生、発生の法則を研究する基礎科学である。心理学は自然科学と人文科学の両分野にまたがる内容をもっている。心理的プロセスとそのオルガニズムの研究、つまり実験心理学、生理心理学、工心理学などは多分に自然科学に属するものであり、個性的な心理的特徴の研究、すなわち社会心理学、教育心理学などはより多く人文・社会科学の範囲にわたるものである。

最近の百年間に、心理学は実験科学の一部門となり、広範な自然科学の基礎の上に、学問としての理論体系をしいに形成した。そして知覚心理学、記憶心理学、思考心理学、情緒心理学、個性心理学、発生心理学を生みだす結果となった。最近の数十年間には、心理学は各実践領域と連系して、多くの分科科学を形成した。たとえば工心理学は現代化された機器、メーター、通信設備の設計と使用について研究し、医学心理学は精神神経症の検査、治療、予防を研究し、発展心理学と教育心理学は異常あるいは正常な児童と青少年の養育と教育の問題について研究している。人間の活動領域はかなり広範囲にわたっている。とくに水中および空中といった特殊な空間領域において人間が活動するには、心理学の一般的なものと特殊な知識が必要とされる。この外に、体育

スポーツ、文学芸術活動、軍事行動、司法裁判などの多くの領域においても心理学に対するニーズが日ごとに顕著なものとなっている。

現代科学技術の発展と各科学間の学際的交流は、心理学を各分科学の交叉点とならしめた。とりわけ、頭脳生理学と電子計算機科学の多くの領域は、いずれもすべて心理学と密接なつながりをもっている。たとえば、神経生理生物化学、心理生物学、生態学、情報理論、サイバネステイックス、人工頭脳などの学問の多くの分野に対する研究はいずれも心理学と交錯しながら進行しており、同時にまた心理学の発展を推進し、かついくつかの新興の心理学研究の領域を生み出している。

専攻生はマルクス・レーニン主義哲学の基本原理を努力してマスターし、かつ数学、物理学、化学など自然科学の基礎知識と外国語を修得することが要求される。卒業生は教育、医学、オートメ生産、軍事などの特殊な活動領域における心理学に関連する研究、教学、実務活動に従事している。

(とりのい かつゆき・中国文学科教授)



北京大学主楼 (シンボルゾーンにある建物) の前で

# ポーランド

——その歴史と風土—— その二

松川 克彦

ポーランド自主管理労働組合『連帯』のワレサ議長訪日は、今から七十七年前、同様にポーランド人の国民的期待を背負って来日したもう一人のポーランド人のことを思い出させる。その名はピウスツキ、独立運動の闘士であった。ロシアの支配、国家の消滅という異常な事態におかれてすでに一世紀余り、日露戦争勃発をポーランド独立回復の好機到来とみたピウスツキが、日本側との接近をはかったのは当然のなりゆきであった。

地図をみれば、広大なロシアをはさんで日本とポーランドは隣国同士。東から日本軍がロシアに攻め入るのに呼応して、西でもポーランドが軍事行動を開始する。さ

らに、ロシアによって徴兵されているポーランド兵士にたいして日本側への脱走を呼びかければ、ロシア軍の戦闘能力は低下して、日・ポ双方の勝利は疑いなし。ロシアにたいして、日本とポーランドが共同で勝利を占めることが可能と考えていたのである。

ピウスツキは一九〇四年七月に、アメリカを経由してはるばる日本を訪れ、直接この考えを説くことになった。ヨーロッパ大陸の中心に位置し、過去幾度もその独立を脅かされてきたポーランド人にとっては、このような国際的政治感覚をもち、行動に移すことは困難なことではなかった。海辺に立つて見回しても外国は見えず、(また

は例の島のように、はるかかなたにしか見えず、国境とは変化しないもの、国家とは永続するものという固定した観念がある我々には、及びもつかないような発想であつたと思う。このような意識の相違が根底にあつたため、ピウスツキの使命は失敗に終わった。しかしそれからすでに八十年近く経過した今日、我々の政治意識は変化したのだろうか。故意に沈黙して語らないワレサ議長の訪日の真意を、我々は理解できただろうか。

私自身国境をもたない日本に育つてきたため、国境線とその向こう側の状況には興味をもつてきた。十数年前初めてヨーロッパに行き、汽車でソ連のブレスト・リトフスクからポ—ランド側にはいつた時には特に感激したことを覚えている。ブレスト・リトフスクを汽車が離れるとすぐにブグ川の鉄橋があり、この川が国境である。鉄橋にかかる手前の無人地帯や、川岸に残つてゐる第二次大戦時のトーチカの跡などを眺めながら、地理的な意味での国境“線”とは何であるかを、目を皿のようにして搜した。頭の中では実在しないことは承知していたが、川の真中には赤い線もなく、縄もはつてないことにいささか失望を感じた。百メートル足らずの鉄橋を渡りきると、ポ—ランドの国章のついた標識が立っているだけであつて、物理的には何の障害もなくいつの間にか“線”

を乗り越えてしまつていたのである。

国境とは政治的な勢力分野、または地理上の約束ごとにすぎないのだと自分で納得しようとしたが、しかし汽車が進んで行きポ—ランドの農家や人が目につくにつれそれだけでもないことに気がついた。民家の構え、屋根の型、壁の色、数分前のソ連領内のそれとは明らかに違うのである。畑に畔がつくられ、馬がそれを耕しているといった風景にはソ連側ではお目にかからなかった。そ



ズゴジェレツ  
手前の低い柱が国境。  
向う側に見える町並は東ドイツのゲルリツ

ういえば川を越えただけで時間さえも二時間違ってくる。明らかにソ連とは違う国に來たという実感は、ワルシャワまでの四時間あまりの汽車の窓からポーランドを見るにつけて、ますます強くなってきた。結局、国境線自体は政治によって定められたものであるにせよ、それが国の境となるのは異なる伝統、文化が接するからであるということは今更ながら感じたのである。

この例をあげるためにもう一つの国境、ブレスト・リトフスクとは反対側の国境をみてみたい。ワルシャワから汽車で西南へ約十時間余り行くと、ズゴジェレツ(Zgorzelec)という東ドイツとの国境の町に着く。ここは戦前まではゲルリツ(Gerlitz)というドイツの町であったが、戦後、町の真中を流れるナイセ川を境にしてドイツ側とポーランド側に分割されてしまった。本来同一文化圏に属しているながら、政治によって分割された例である。

元來この地方、シロンスクに住むドイツ人は、戦争終了と共にナイセの西へ追放され、代わってこの地に移ってきたのはかつてのポーランド東部領、つまりヴィルノから南のルヴフへ至る地域一帯に住んでいたポーランド人であった。これらのポーランド人達は、ソヴェト軍によって占領された東部領から追い出されてきたのである。例え民族が異なり国境で隔てられていても、幾世代も隣

り合わせて住んでいるうちには、様々な形で接触、交流が深まるものである。しかし大戦後、スターリンによってとられたこの処置は、こうした自然な民衆の動きを断ち切ってしまう程徹底したものだ。かつてドイツ人とは接触のなかった数百万のポーランド人を東の端から移動させてドイツ民族に対置させたのである。これによってスターリンは、国境線を大巾に西へ推しやることに成功して地理的に領域を広げると共に、ソ連、ポーランド、ドイツ、それぞれ国境附近に住む諸民族相互の自発的な交流を封じたのである。

さてこのゲルリツだが、戦後の一時期、町にはいつてきたポーランド人移住者とまだ町から出ていく準備が整っていないドイツ人とは、同じ屋根の下で暮らすようなこともあった。しかし戦後三十六年経過した今日、ドイツ人によって基礎を置かれドイツの町であったズゴジェレツは、ポーランド風に変化してきた。例えばドイツ人墓地がまだ残っているにせよ、ナイセの向こう側ゲルリツのくすんだ町並とは完全に違う、別の町となってきた。住む人によって町はつくられる。ポーランド人が住む所、それがポーランドとなる。分割時代に歌われ、現在の国歌となっている『ドンブロフスキ行進曲』は、「我々が生きる限り、ポーランドは滅びず」という歌詞で始

まるのであるが、ポーランドの置かれてきた政治的状況を端的にあらわしていると思われる。

最後にもう一箇所、ポーランド南部、チェコスロヴァキアとの国境をみてみたい。スデーティ山脈の尾根が両国の国境となつているこの地域は、国境“線”という意味では本来の国境に近いようにみえる。この尾根沿いには巾四メートル程の石畳の道が走っており、この道が国境である。石畳の道自体は中立地帯であり、両国の登山



ポーランド・チェコ国境  
正面の山(シュニエシユカ)へ続く道が国境

者、ハイカー達はここを歩くことができる。しかし道は決して向こう側へ行くことはできない。つまりポーランド人がこの道を越えて南側へ出ること、またチェコ人が北側へ出るとは禁じられている。両国民がまざりあつて歩いていると、相手側にまぎれこんで越境してもわからないように思えるが、要所には国境警備の兵士が立つており、無断の越境者を見張っている。チェコ人とポーランド人の見分けがどうしてつくのかと不思議に思うのであるが、警備隊の兵士には、顔つきや服装などで国籍の区別がつくというから、職業柄とはいえ感心する他はない。

ポーランドの国境の中でも、人の住んでいないこのスデーティ山脈沿いの部分は、すでに十一世紀以来チェコとの国境として認められており、最も古く、比較的安定した国境線の一部である。しかし独逸、ポソ国境のように直接強力な異民族と接し、文化が異なる故に紛争をおこしてきたもつと重要な国境は、高度な政治的配慮、軍事的力関係によつて定められ、東西に動いてきた。ポーランド人はこうした動きの中心にまきこまれ、逆にこれを積極的に利用する感覚を身につけていったのである。

(まつかわ かつゆき・京都産業大学専任講師)

## 抵抗の科学技術

梅林宏道著  
技術と人間 1800円



資本主義社会の必然としての諸問題、諸矛盾の結果、公害が続出した。水俣、騒音等と数をあげるに事をおかない。公害と対峙する反公害闘争は、高知生コン事件を契機として

大衆的実力闘争の質を獲得し、激化する反公害闘争に恐怖した日本帝国主義は、公害関係法案等をあめとして与える一方、機電法をはじめとして、重化学工業主導型から知識集約型の産業構造の転換でもって、延命の道を見い出さんとしてきた。

そして、科学・技術の中立という幻想に塗り固められた小世界の内に自己満足する科学者・技術者は、日本帝国主義の侵略への技術開発・研究に奔走し、あげくのはてに、侵略兵器の開発に自分の技術者としての情熱をか

たむけている。

科学・技術をとりまく現況はきびしく、将来的に、テクノファシズムと呼ばれる、生産と生活の様式・内容、経済の運営や政治執行形態、さらに、民衆の思想の形成とそれへの支配、感情や情念のあり方にまで、科学・技術が規定する状況がおとずれようとしている。このような事を考えると、「夜も寝れなくなる」そんな夜にとりとめのない事を考えるのもいいが、本書を精読されんことをおすすめする。

現代技術史研究会

## 権力の構造

秋元律郎著  
有斐閣選書 1600円



権力というものを考える時、いつもこのことばのひびき、意味あいから、あまりいいイメージというものはうかんでこない。

さて、この本の表紙にうつつている議事堂

が象徴するものはいったい何なのであろうか。すべての権力はこの議事堂にありといわんばかりには見えないだろうか。そして、権力像を考える際にまず最初にかんでくる「権力エリート論」をまず展開するのだなというところが本を手にした時まずひらめくのは当然といえよう。ここでこの権力エリート論を著者のことばをかり簡単にまとめると、「かつて分権的な政治機構の中で多元的な利害の抑制と均衡を維持してきた社会から、すべての重大

な政策の決定が、一群の支配集団の手からめこまれてしまっている。そしてその頂点にたつのが経済・軍事・政治エリートからなる少数グループである」ということである。しかし、著者の視点は権力エリート論と、リースマンに代表される多元論との比較により、より明確に権力とは何かということを浮きあがらせることのようにみうけられるが、曖昧な点もなくはない。しかし、全体的にまとまっていて大変な力作である。

(H)



# お知らせ

## 編集委員募集

書評運動は、生協運動の一環である教育・文化活動を担って発展してきました。しかし、現在の文化が、画一化・既成化される中で、独自の文化活動を完遂させなければならぬのかかわらず、編集委員不足という物質的な絶対的不足とそれにも増しての編集委員の力量不足が相乗的に重なってしまい、満足のいける活動はできません。

そこで書評編集委員を募集したいと思えます。現在の閉ざされた暗黒の文化情況に少しでも独自の文化の火を点したいと思っている方、あるいは新たな文化運動、思想運動の必要を感じている方、編集の仕事を手伝いたい

と思っている方、是非書評編集委員会において下さい。私たちは諸君に自由で、創造的な活動の場を提供したいと思えます。

なお、書評編集委員会の活動は、書評誌の定期刊行化はもちろんのことですが、講演会、映画会の開催等の、広範な文化・思想活動を形成しようと考えています。

書評編集委員会は、読者の積極的参加を期待します。

## 投稿規程

最近読んだ本の書評・内容紹介・批判等の作業を通じて自己の主張を述べたもの、現状分析、研究成果の発表論文、エッセイ等どのようなものでも結構ですし、書評誌の中の個々の作品に対する反論・批判等でもかまいません。

せん。詳細については生協本館3F組織部内書評編集委員会まで直接にお問い合わせ下さい。

◆原稿は原則として縦書きで、1行25字、22行を1枚とします。

◆原稿には住所、氏名、学部、電話番号等連絡先を詳しく明記して下さい。

◆原稿は一切返却しません。必要な場合はコピーをとっておいて下さい。原稿の採否に関する問い合わせには一切応じません。採用分にはこちらから連絡します。

◆連絡先

〒565 吹田市千里山東3-10-1

関西大学生活協同組合「書評」編集委員会

電話 06-3388-1121 内線4821

〈合評会に関するお知らせ〉

書評編集委員会では、ともすれば一方的になりがちな書評を、読者の意見・感想をとりあげた「読者の参加する書評」を目ざし、合評会を開催します。今後の読者の積極的参加を望みます。

編集後記

まず、読者の方々に申しあげておかなければならないことは、今年こそ特集を組み、その特集にそって展開していこうと考えていたのですが、編集委員会内部での学習の不徹底、討論不足等々の内部事情により、特集が流れ、書評と連載だけになってしまいました。このことを読者におわびするとともに今後の反省材料とし、次号からは特集を完全に組みきっていきたいと思います。

次号は、「在日朝鮮人作家」特集です。五月十一日おこなわれた講演会「韓国民主化闘争の底流に迫れ！」（講師 金時鐘氏）の講演録、李恢成氏の一連の「見果てぬ夢」の書評などを企画しています。乞うご期待！

尚、文学部教授山村嘉己氏の連載「ボードレール」は先生の都合で休載させていただきます。



1981年6月号 通巻56号

---

編集・発行 関西大学生協同組合・組織部「書評」編集委員会  
連絡先 吹田市千里山東3-10-1 (☎358-1121 内線4831)  
頒 価 250円